

バリアフリー映画を

スタンダードにする

するために

平成20年度障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）映画活弁士の活弁手法を活かした視覚聴覚障害者のための副音声の開発ならびに製作事業（バリアフリー映画製作事業）

バリアフリー映画を  
スタンダードに  
するために

平成20年度障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）  
「映画活弁士の活弁手法を活かした視覚聴覚障害者のための副音声の開発ならびに製作事業（バリアフリー映画製作事業）」

# バリアフリー映画を スタンダードに するために

ごあいさつ	03
「架け橋」としてのバリアフリー映画を	04
[座談会]映画に付ける聴覚障害者用字幕をめぐって	06
[座談会]活弁の技術を活かした視覚障害者用の映画副音声をめぐって	12
シアタートーク①バリアフリー映画をスタンダードにしよう！	18
びわこアメンティ-バリアフリー映画祭2009 プログラム	27
シアタートーク②このたび製作したバリアフリー映画のできればは？	28
映画のバリアフリーと複合現実感ハードウェアの関係	40
第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会 アートはボーダレス 舞台挨拶	41
作品解説	52
研究会委員のメッセージ(映画のバリアフリーについて)	54
製作日誌	60
聴覚障害者用字幕スーパーについて	64
副音声活弁について	67
『THE CODE/暗号』字幕用台本	68
『絵の中のぼくの村』副音声用台本	70
『猫の恩返し』副音声用台本	71
資料	72
研究員名簿	76
バリアフリー映画の上映案内・申込書	79

## じゅあいさつ

田中正博 研究会委員長 NPO法人全国地域生活支援ネットワーク代表理事

誰もが一緒に映画を楽しめるような真のバリアフリー映画を目指して、1年間研究会を重ねてまいりました。「障害のある人たちのために」という一方通行の発想ではなく、皆が楽しめる視覚障害者用の副音声や、聴覚障害者用の字幕を開発したい、との思いからでした。

そのため研究会には、バリアフリーの研究者、障害がある人たち、映画プロデューサーや映画監督などに加わってもらいました。視覚障害者用の副音声は、画面を解説する従来の副音声ナレーションではなく、登場人物の感情の動きや風景の意味などを、活弁により感情の通った、生き生きとした作品として完成しました。また、聴覚障害者用の字幕は、画面の中にある音声を単に補うだけでなく、字幕文としての物語性を重視し、擬音語にも配慮した作品になりました。

将来は、映画製作の中に当然のこととしてバリアフリーを位置づけていくことが大切だと考えています。

今回製作した5作品のうち、特筆すべきは、アニメ作品(スタジオジブリ作品)が1本、公開前の作品が1本あったことです。「ぐるりのこと。」「花はどこへいった」「絵の中のぼくの村」「猫の恩返し」「THE CODE/暗号」これらの作品を3会場で上映できたと同時に、研究会メンバーによる公開シンポジウムにて、その成果、課題について発表いたしました。

映画は万人に開かれた娯楽でなければなりません。ぜひ、バリアフリー映画をお楽しみください。

# 「架け橋」としてのバリアフリー映画を

福島智 研究会副委員長 東京大学先端科学技術研究センター教授

「映画をバリアフリー化する」とは、どのようなことか。製作段階からそれを意識した作品、「THE CODE／暗号」を例に考える。

この映画のバリアフリー化の特徴の第一は、「活弁的副音声解説」だ。これは視覚障害者の観賞を想定した従来型の「必要最小限」で「客観的」な副音声解説ではなく、「解釈的」でそれ自体が「芸術的」な解説である。特徴の第二は、聴覚障害者のための字幕解説でも、擬音表現の導入など、いくつかの工夫がなされたことだ。ここでは前者を中心に述べる。

この映画での音声解説には、①事物、②人物、③事物と人物の関係、という三つのカテゴリーの描写が見いだされる。さらに、②の中には、「表情」、「動作」、「心理描写」が含まれる。

「その座席の下で、稲妻のように青光りするガラスの筒が一つ」。これは事物についての描写だが、従来の副音声解説ならば、単に「青く光るガラスの筒」と表現しているところだろう。次のものは、さまざまなカテゴリーの描写を含む代表的な例の一つだ。

「拍手と共に紗幕が開き、姿を現す女、美蘭(メイラン)。透明な白い肌は、光の中で、輝きを増す。意志の強さと哀しみをたたえた瞳が、満員の客席に向かって微笑みを投げかける。赤いスパ

ンコールが散りばめられた、裾の広いチャイナドレスを身にまとい、右の手に持った紅色の羽の扇子をひるがえして、優雅に歌う美蘭。それは、時に女王のように高貴で、時に、蘭の花のように儂い」。流れるようなリズムと共に、ことばによって映像のイメージが豊かに広がる。

しかし、こうした映画のバリアフリー化の試みにもいくつかの課題がある。①障害のある鑑賞者にとってどのような音声解説や字幕説明が分かりやすく適切であるかを評価する手法について、今後さらなる検討が求められる。②仮に一般の観客と同一コンテンツを觀賞することを目指すのであれば、こうした付加的解説が「過剰な情報」となって忌避される可能性がある。③の問題を克服するためには、③障害者の多様なニーズに対応したコンテンツを準備するか、あるいは、ITの活用等により、各鑑賞者が選択的に付加的解説情報を得られるよう目指すことになり、④だが、それをあまりに追求すれば、共に同じ映画を觀賞するとは言えなくなってしまうという相克にぶつかると。こうした課題をどう考えるか。

障害を含め多様な条件を抱える人が映画などの芸術作品を「同じように」觀賞することは原理的に不可能であり、またその必要性もないのではないか。重要なことは、多様な条件を抱えた人に開かれた作品づくりや観賞の環境づくりだ。そして、そのためには、作品の製作や公開準備の段階から多様な人材が協力することであり、さらには製作者自体の多様性を高めることだろう。

「バリアフリー映画」の試みは、映画自体のバリアフリー化に取り組むだけでなく、障害の有無を越えて、人と芸術を繋ぎ、人と人を結ぶ架け橋になることを同時に目指すべきものなのだと考える。

# 映画に付ける 聴覚障害者用字幕を めぐって

2009/02/02 19:00 - 20:30 東京大学先端科学技術研究センター  
中野聡子、飯泉菜穂子、赤松立太、(進行)山上徹二郎



山上徹二郎  
映画製作・配給会社シグロ代表  
日本映画製作者協会理事



赤松立太  
パッション  
字幕製作会社代表



飯泉菜穂子  
学校法人 大東学園  
世田谷福祉専門学校



中野聡子  
東京大学先端科学技術  
研究センター

**山上**  
バリアフリー映画について、それぞれが気づかれていることや問題だと思われる点、また感想などをお聞かせください。

**中野**  
この研究会に参加して、聴者と聴覚障害者では音や音楽に対する価値観が非常に異なっていると感じました。聴こえない人にとっては、聴こえない状態で映画を観るということとは当たり前で、特別不自然なことではないのです。しかし、聞こえる人は「音のない映像は、楽しみが半減してしまっているに違いない」という思い込みがあります。これが、お互いの理解が進まない理由だと思っています。

バリアフリー映画についても、聴者とまったく同じように、ろう者が観るのは難しいと思います。もっと発想を変えて、まったく違う状態でもいいということを一一般の方に分かっていただけたらな、と思います。

**飯泉**  
音があるのが当たり前という私も含め

う受け止められるかの両面で考えるということをやらなきゃならないという、二つのことが大事だと実感しました。

通常は、音や、台詞を、そのまま字幕に入れて入れ込んでいけばいい。効果音の説明など、台本で言えば卜書きに当たる部分は、説明を増やそうと思えばいくらでも増やせるわけで、それは容易なんです。字幕による説明を減らす、この部分は要らないと断定するのは怖いところがあります。

それが、中野先生のお話を聞いて、なるほどと思いました。『THE CODE / 暗号』のような作品では物が地面に落ちる場面ですとん」という字幕は要らない、というふうに判断の基準を与えてもらった。

音楽については、非常に難しい。私は、本来、音楽すべてについての字幕は不要ではないかと思っていますが、例えば、『花はどこへいった』の中には、ギターの音、ピアノの音があります。ギターの音が出てきたのは、60年代、ベトナム反戦運動の思い出のシーン。ギターは当時の時代を象徴する楽器であり、ギターが鳴っていることを説明する字幕を入れました。ところが、回想シー

た聴こえる人と、生まれたときから音が無いのが当たり前である、ろうの人たち、そして音があるのが当たり前だったのに人生の途中で聴こえなくなった中途失聴や難聴の人たちでは、情報を得る方法として手話がいいのか、書記日本語がいいのかも、それぞれ違うと思います。

映像についても同様で、なかなか難しいものがあると思います。同時に同じ情報を皆が共有したから皆が幸せということなのか……？ 作り手の意図と受け止める側の個性や障害などに合わせて、楽しみ方にもいくつかのパターンがあつて、「選ぶことができる」のが本当のバリアフリーなのか？ 私自身があらためて考える機会になりました。

**赤松**  
今まで、聴覚障害者のための仕事はしてきましたが、障害を持つ方々と一緒に作業をすることはなく、いい機会を得られたと思っています。また、一つ一つの作品自体の持つ性格に応じて字幕の付け方の方向性を決めること、それを観る人の立場でど

ンへの演出の導入部になるわけです。後のシーンで、ピアノの独奏があるけれど、こちらはギターの音ほど言葉に置き換えられる演出的な性格付けはないかもしれない、でもギターについての字幕だけ入れて、ピアノについての字幕は入れないというのはバランスが取れないな、と思いました。一方は入れて一方は入れないことで、別の意味が生まれかねないんです。

『猫の恩返し』では、音楽の説明字幕を入れない方針を採りました。ただ、猫たちの行進のシーンで、行列自体が音楽を演奏するとうような場合、字幕を入れていきます。画面に猫たちの行列が出てくる前に音楽が始まって、その音楽によって屋根の上に乗った猫が振り返るといふ、一連の演出の要素として入れておいたほうがいいと思います。聴者が耳で聞く、「シャリン」といふ鈴の音が印象的なので、擬音語として入りたいと思います。

また、アニメーションの場合、話者が分かりにくいということが指摘され、これは新しい大きな発見でした。この作品のような質が高いアニメーション作品では、話者

の口の動きも丁寧に描き込まれています。しかし、画面をいっぱい使った登場人物の配置、デザイン的な口の小ささなどが、ろう者にとって話者の判定を実写以上に難しくしているようです。アニメーションでは声優がキャラを立てた声を使っていますから、聴者の場合は、それを自然に受容しているのでしょうか。このことは、森田監督にとっても僕にとっても大きな発見でした。これに対応して、話者の表記を増やし、細かく字幕の位置を調整し直しました。

## 山上

私は、今回のバリアフリー映画の研究会で、中野先生から二つ大きなことを学ばせていただきました。

一つ目は、「障害のない人たちと、同じ時に同じ映画を観ることができると——例えば、映画が封切されたとき、一般の人たちと一緒に、同時に観ることができると、ということも大事なバリアフリーではないか？」と言われたこと。それは、私にとって大きな気づきでした。「人とつながりたい、コミュニ

ケーションをとりたい」ということが、映画の一番大きな役割だし、楽しみでもある。その原点に触れるお話だと思いました。二つ目は、「ろう者と健常者は、振動や匂い、香りや匂いに対する感情が共有できれば、例えば〈百合の香りのような音楽〉や〈金木犀が香り立つようなメロディー〉といったように、ろう者に音楽についても感覚的に伝えることができる可能性があるかもしれない。とても難しいことかもしれないが、チャレンジしていく価値があるのではないか」と思っています。

## 飯泉

もし、香りの比喻を入れるとしたら、〈〉の香りのような音楽ではなく、〈〉が香るような音楽としたほうが、いいのではないのでしょうか？

ただ、聴こえない人たちが目で受け取る情報量は、聴こえている私たちが感じるよりも、ものすごく多いと思うんです。日常生活の中で音がまったくないというのが当たり前だから、映画の中で語られている

ものについても映像だけで十分で、作り手がつけたものであるとしても、音楽は必要ないという気持ちのほうが強くなるのかな、という気がします。

## 中野

音楽についての字幕は、あくまでもストーリーを補完するためという位置付けで入れてもらえばと思います。

そもそも、ろう者が音楽的な感性を一切持っていないというわけではありません。『猫の恩返し』を観ても、猫たちが行列で進んでいくとき、実際の鈴の音や笙の音のリズムとは全く異なりますが、文字の出るタイミングでにぎやかな昂揚したリズムが喚起されました。また、言葉には韻を踏むというリズムがあり、文字の並びにもリズムがあると思います。映像の動きと文字のリズムによって音を感じ取ることはできるので、この場面の音の字幕化は大変効果的だと思いました。

## 赤松

これまでは、映画の中に表現されている

音の情報を、聴覚障害の人、目の見えない人に向けた追加の文字情報として映画に入れていき、耳の聴こえない人に分かるようにしよう、という発想が強かった。

今は、自分の、その考えが、だんだん変わってきた気がします。映画には映像と音があるわけですけど、その音を取り去った作品の中で、文字と映像でどこまで表現的にまとめられるかという発想に変わってきました。音のない世界で映画を翻訳し直すというか、音のない小宇宙の中でバランスを取りながら、映画作品を組み立て直していく作業なんだと思います。

## 山上

私は、映画の中で使われている音楽について、字幕で説明することに、もっとこだわってみたいと思います。音楽というのは、映像を立体的により奥深く見せることのできる映画的表現の一要素として、大事なものだと思うからです。

映画の作り手は、映画のシーンの意味や意図をより深く正確に伝えたいために音楽を使います。例えば、優しい音楽が流れ

ているシーンでは、そのシーンを優しさで感じてほしいと思っている場合もあります。ですから、この〈優しい〉という形容詞の部分にこそ、伝えたい意味や大事な思想といったものがあると思っています。そういうったわけで、『花はどこへいった』では〈優しい音楽が流れる〉といった字幕を入れてみました。

## 飯泉

映画好きである私としては、映画は作り手のものであると同時に観る者のものでもあってほしいと思います。

手話通訳でも日々苦労しているところであり面白いところもありますが、コミュニケーションでは、発し手が込めている意図が、そのとおり受け手に伝わるとは限りません。音楽にしても同様で、例えばハリウッドの大作映画では、作り手は気持ちを盛り上げようとして音楽を付けているのに、観客のほうは「どうせ、泣かせようとしているんじゃない」と白けてしまうというよ

うな微妙なズレが、時に不幸だったり面白かったりします。つまり、解釈のズレ

があるのが、作品を鑑賞する面白さなのではないかと思うのです。それなのに、BGMについて〈優しい音楽〉というふうな字幕を付け、〈優しい〉という形容詞で作り手の意図を説明することはどうなのかな、と感じます。いろいろな情報を足したり引いたりして、聴こえない人により多くの情報を伝えていこう、という目的は何か……と考えたとき、それは、映画を通して何かを伝えてあげるのでなく、映画を楽しむことを共有することだと思えます。

この〈共有〉という言葉も難しく、場は共有できる、事実は共有できるけど、真実は共有できないかもしれない。映像で語られていることを観ることは共有できるが、そこで感じた、心に残った何かを共有することは難しいことを考えると、誰もが均等に情報を共有できるようにするための努力が、果たしてどれくらい意味があるのかな？と思ってしまうのが、映画好きです。でも、作り手は、自らの思いや意図を伝えたいんですね？

例に挙げられたようなハリウッド映画は、全篇を通して音楽がバックに流れていて、感情を誘導していく作品が多いのです。例えば、ここで泣いてほしい、とそのシーンをフォローする形で音楽を付けたりします。私たちは、そのようなハリウッド映画とは違った音楽のつけ方はないのか？ 映像に対して音楽をどう位置付けるのか……、そういう戦いをしてきました。

私たちが映画を作る場合、映画にとって音楽はとても大事であるが故に、映像に対して、時に音楽を批評的に使うことをもあります。音楽は、映画の大事な一部であり、映像にとってはライバルでもある。だからこそ、映画の音楽に込めた作り手の意図を、聴こえない人に伝えることを簡単にはあきらめたくないのです。

## 中野

ハリウッド映画では、音楽が流れっぱなしなんですか？ずーっと流れているというのは意外でした。私も相当数のハリウッド映画を観てますが、音楽が聴こえないか

ら映画がつまらないとは思ったことがないので、意外な感じがしました。

ろう者の場合は、音の代わりに、映像からいつも何か、様子、動きを視覚で感じて、理解しています。たくさん見逃した情報があることでストーリーが分からなくなっただけなので、映像の中で見えるもので、すべてキャッチしようとしています。そのため映像を、より深く分析的に見るようになっていくのではないのでしょうか。

例えば、『猫の恩返し』の冒頭でトラックが走ってくるころも、トラックの音はもちろん分かりませんが、大きな車が迫ってくるという映像で、その緊迫感を的確につかんでいます。それが映画の理解につながっています。

そういう意味でも、映像で十分理解できるのに、余計な説明をされると、かえって邪魔になるといえます。音楽も同様のことかと言えらると思う。場面によっては音楽についての字幕による説明は、要らないかもしれないのです。字幕のある状態を動、字幕のない状態を静としてとらえるなら、動と静をうまく使い分けてほしいと思います。

静の状態によって、息を飲むような緊迫感や、はっとするような驚きをうまく表せることもあります。

## 山上

なるほど。それでは、最後に一言ずつお願いします。

## 赤松

既存の映画作品に説明のための情報を付加するものとして、聴覚障害に対応する字幕を作っていくという考え方から、音のない世界でその表現を構築するという方向で、自分の考え方がまとまってきたと思っています。

## 中野

先ほど説明ができなかったのですが、聴覚障害児が字幕を見たときに、どういう目の動きで映像を捉えるか、という約10年前に行われた研究があります。

その研究結果から考えると、映画は横長の画面なので、字幕も横書きのほうがいいのではないかと思われるんですね。

また、シーンが展開して場面が変わると

き、最初に字幕に目が行くまでに0.2秒くらいかかることが分かっています。このことから言えるのは、字幕の表示位置が画面の左右だったり上下だったり、そのたびに変わってしまうと、字幕の読み始めがさらに遅延してしまうということです。

このように、字幕の表示の仕方などについて、科学的な実験を行ってみると、いろいろ分かることが多いと思います。それらも参考にしながら、よりよい字幕について考えていただければと思います。

もう一つ、一口に聴覚障害者といっても、受障時期や障害程度、年齢、日本語の能力などさまざまです。インターネットで映画の配信をするという場合には、「もう少し、ゆっくり観たい」とか「巻き戻してみたい」「字幕の表示時間をアレンジしたい」という個人的なニーズがあると思います。個々で映画が観やすいようにカスタマイズできるような配信が実現するといいたいですね。映画館では、そのようなことはできませんから。

また、同じくインターネット映画配信で、

難聴者のためには、耳で音を拾いやすくする音声処理をしたほうがいいと思います。

例えば、話速を遅くするか、音をクリアにするとか。軽中度難聴で聴覚活用ができる人や、加齢による難聴者の場合は、耳で聴いて分からないところだけ字幕でフォローする、ということがしやすくなると思います。

## 飯泉

今日のテーマは字幕ですが、中野先生がお話されたように、難聴の人などには、音を聴き取りにくくても耳の活用を望むタイプの人もいますので、例えばループシステムを使うことで、場の共用がしやすくなるという方々もいらっしゃいます。

## 山上

ユナイテッド・シネマ大津と、彦根のピバシティではループでやります。

## 飯泉

現場で試みたことへの反響や反応を返してもらおうのが大切ですね。

## 山上

引き続き、アメニティーネットワークフォーラムで議論を深められたらと思います。本日はありがとうございました。

# のたのを 活かし用声を 活か者音ぐ を障害副め 技術覚映 視

009/01/28 16:00 - 17:15 シングロ 会議室

大河内直之 佐々木亜希子 山上徹二郎

佐々木亜希子  
活動弁士大河内直之  
東京大学先端科学技術  
研究センター  
リサーチフェロー山上徹二郎  
映画製作・配給会社シングロ代表  
日本映画製作者協会理事

**山上**  
まずは大河内先生、研究会に参加されて、いろんな監督にも会っていただき、実際に作品にも接していただいていた感じ、これらしたこと、お考えをお聞かせください。

**大河内**  
視覚障害・聴覚障害それぞれにとって、映画というものの体のバリアは、決して大きいものではないと思います。

それより、視覚障害者が映画を楽しめなうとしたら、その理由は何だったのかというところを、映画の製作者側も障害当事者側も、これまで掘り下げていく機会がなかったことのほうが問題だった。「自分たちにとって関係ない」という思いが、当事者のほうにもあったのかもしれない。観たいけれど観られないから観たくないという感情もあったかもしれない。それは自分とは関係ないということにすることで、納得するという感情もあるでしょう。

一方、こういう機会があることで、そうした感情を少しずつ、取り払っていくことができることと、何にでも可能性があることを壊さず小説のように語って、想像力に委ねていくべきなのか……。作り手である監督が「ここはこう伝えよう」というふうに最後のジャッジをしてくれるのが楽しんだりしやすいな、という思いはあります。

**大河内**  
「どういう情報が必要なのか？」と佐々木さんがおっしゃったことですが、それはその人その人で違ってしまふので、究極的に何を優先するべきかは、なかなか難しいと思います。

佐々木さんがおっしゃるとおり、「監督は何を伝えたいのか」をベースにすることが大きな柱かなと思っています。とは言いつながらこれまで作ってきた、ト書きとしての副音声が決して悪いわけではありません。そういう意味では、この5、6本のバリアフリー化された映画は、これだけでもいろいろな議論の要素が出てきていると思います。こうした意見が出てくる中で、さまざまな視点で議論できるのではないかと考えています。

いうことを再発見できることが、非常に重要なことだと思います。

今回、映画の製作者側と観る側の障害当事者が一緒に作っていくことの大事さを、改めて実感しています。最初にルールを決めてしまつてから議論するのではなく、まず、ルールの垣根を取り払って何か実行してみ、それが良かった、悪かった、と議論しながら新しいものを作っていくというプロセスそのものが大事だと思っています。したがって、今回は、既存のルールも情報として持ち合わせながらも、それにあまり縛られずに、今までやっていたことは何なのか、すべてをテーブルの上に乗せてみるということが一番大事だと思います。

**山上**  
次は、副音声を担当していただいている佐々木さんに質問します。バリアフリー映画の副音声の原稿を誰が書くかや、その書き方などについて、実際に関わられて感じてもらえることを含めて、ご意見いただければ。

**佐々木**  
日本の書き方もいろいろありますし、そもそも正解はありません。監督には「こういうふうに見たい」という意図があり、見る側・聴く側も「これでは足りない」とか「これは面白い」という感想を抱くわけです。その間を取れるのが、本当は、一番いいんだと思います。

活弁の場合は、観る側であり伝える人間でもある活動弁士が好きに味を付けていく、主観を入れながら工夫して伝えていくことで、さらに面白くしていくという台本の作り方なんです。

それに対して、副音声の台本作りの場合は、見えているものを正確に伝えようという思いがすごく強くなっています。そのため、短い尺の中で何を優先して入れるのか、考え込んでしまいます。

また、目が見えている私は、そうではない人たちにどこまで説明しているのか、とても迷います。今、スクリーンに映っているものをしっかり説明したほうがいいのか、それとも、ストーリーテラーとして流れ



山上

アニメーション『猫の恩返し』では、監督の森田さんにも入っていたいただいて打ち合わせをしました。アニメについては、いかがですか？

大河内

やっぱり新鮮ですよ。たとえば、副音声によって登場する目覚まし時計が牛の形をしているという情報が入ることで、映画を観るときの厚みのようなものが増してくる。楽しさやイメージがまた変わってくるのだと思います。

アニメというものは絵からもいろいろなことを伝えていくのだということも共有することが大きい。ストーリーを追うということだけではない楽しさを、副音声が与えてくれていると思います。

今でも、アニメを楽しむ視覚障害者はたくさんいますが、こうした取り組みにより、さらに新しい視覚障害者のアニメファンが増えるのではないかと期待があります。

山上

子ども時代に観た映画や特にアニメは強烈な印象、強い印象があって、そのことで友だちといろんな会話をしたり、情報を共有したり、コミュニケーションしたりというのがあると思います。

大河内

僕個人としては、戦闘シーンが多いものや擬音が多いものは、その間が空白になっってしまうような気がします。その点、『キャンディキャンディ』といった少女向けアニメは台詞が多い、心理描写も多いので分かりやすいということがあって、そっちの傾向のアニメに流れてしまったというか。

佐々木

心の中の声も全部、出てきますもんね。

大河内

好きだったアニメは、『めぞん一刻』です。原作漫画が出版されていることは知っていたのですが、なかなか読むことができなかった。アニメ化されたときはうれしくて、

一生懸命、観てました。

その一方で、『機動戦士ガンダム』は、視覚障害者にも好きな人がいますが、僕にとつては戦闘シーンが多かったり、台詞が少なかったりで、つまらなかつた。もちろん僕の想像力が足りないだけかもしれませんが、映像がどうなっているか分かっていけば、また違ったかもしれない。

山上

擬音・アクションを説明するのが、副音声に課せられた役割として大きいですよ。佐々木さんは、今回、副音声を担当されたことによって、活弁に対する考え方に変化がありましたか？

佐々木

活弁には、言葉にすることで、画面にいろいろ映っている中のあるものに観客の視点を集中させることができます。活弁士である私が、「面白いのは、ここなんだよ」とか「見逃がしてしまいそうだけど、これが監督の張った伏線なんだよ」と、皆さんを注目させるということですから、活弁と

いうのは私の主観が結構入っているものだな、と改めて思いました。

活弁の公演には、眼の不自由な方もいらっしゃるんです。ほとんど目が見えないという方がいらっちゃって、「すごく面白かった。流れも、とても分かりやすかった。非常に楽しかった」とおっしゃってくださいます。

山上

いつも言うことなんですけど、今回の試みは、「障害のある人のためにやる」という一方的な関係ではなく、自分たちの想像力を広げていくことが大事だと思うし、関わっていて面白いところです。

佐々木

私も、それはすごく思います。

例えば、晴眼者も、副音声無しで観た後に副音声付きでもう一回観ると、印象が違って何度も楽しめるわけです。子どもたちも、副音声付きなら、「これは、こういうことだったんだ」と気づいてくれるし。だから、いろんな可能性があるな、と。活弁をやっ

いたときも、いろんな方々から「現代の映画にも付けたいのにな」という声をたくさんいただいたんですよ。

ですから、新しい一つの方向性として開拓する意味があるんじゃないかと思っ

山上

大河内先生、本編が始まる前に、佐々木さんに、あらすじであったりポイントであったりといった「前口上」を付けてもらっています。そういう情報は邪魔なのか、もつと違う情報が欲しいのか、その辺はいいですか？

大河内

どういう映画であるか、という心の準備をする意味でも非常に面白い。本の帯を読むような楽しさがわいてきて、とてもいいと思っ

山上

今回の試みとして、『絵の中のぼくの村』では、副音声のライブを上映会場でやってみていただきました。DVDで「らんになる場合と比較して、どうでしたか？

大河内

非常に新鮮でした。ライブでやるということ、そこでしか感じられない面白さを映画でも感じられるということを再発見しました。映画が封切られたときに何回か、副音声のライブという機会があると、それに魅力を感じる人が視覚障害者以外にもいるのではないかと思います。

山上

佐々木さんの副音声のライブを付けて盲学校で上映会をしていただくというのは、どうでしょうか？

大河内

できれば、盲学校の生徒と一般の学校の生徒と一緒に観る映画であってほしいです。映画をきっかけに特別支援学校の子供た

ちと地域の学校に通う子どもたちとの交流が広まるような役割を果たしてほしい。

山上

目の見えない子どもたちだけに見せるというだけでなく、いろんな人と一緒に観る、つまり集まって観るということが、映画鑑賞のいいところなんですよ。

佐々木

一緒に笑いがおこるとか、しーんと聞き入るとか、上映している空間ごと、聴こえる人と聴こえない人が一緒に楽しめたら一番いいですよ。

大河内

健常者と障害者という交流も一つのあり方ですが、異なった障害のある人たち同士と一緒に観ることがあっていいと思います。この研究会の取組も、障害の異なる人たちが、同じ場で議論をする、交流をする、お互いのニーズについて知ることにつながってほしい。

山上

映画の副音声の手法は演劇にも活かせると思うのですが？

大河内

面白いでしょうね。演劇の場合は、舞台の役者さんの息づかい、役者さんの動きが手にとるように分かるわけですよ。情景は舞台の上ですから、セツトはあるにしても、もっと想像力に訴えなくてはならない、メディアとしての機能を果たさないといけない……。映像の説明とは違う、もう一歩踏み込んだ、でも、台詞を邪魔しないように、究極的に、活弁という機能を発揮できるのかもしれない、と想像します。

山上

活弁の技術を応用した副音声は、いろんな表現に対して開かれていく可能性を持っていると思います。おそらく、副音声そのものが果たす役割は、コミュニケーションというか、人と人をつないでいくということなのかもしれないですね。

大河内

活弁が付くことで、これまで映画館に行かなかった人が足を運ぶことは考えられます。そのように広がっていくきっかけにはなると思います。

山上

「副音声で、後口上もありかな？」という話をしたこともあります。映画が終わった後に、この映画で言いたかったことは、そういうことだったのかとか、あそこの音はそういう意味だったのかとか。通常の活弁ではそういうのはないのですか？

佐々木

あります。映画が終わった後に、役者さんの情報とか背景について少し話したりします。

山上

そのまま活かせるかも。ライブで副音声をやるときに、試みとして後説を入れてみるというのもありかもしれませんね。それでは、最後に一言ずつお願いします。

約一年やってきていかがでしたか？

佐々木

難しいですけど、いろいろな人たちが一緒に楽しめるように、映画の原点とこの先を考えていくきっかけとして、大事に取り組んでいきたいですね。

大河内

5本の映画をいろいろな人に観ていただいて、またその感想を聞きながら、今後、どういう作品に付けていくのかということと考えるのが楽しみです。また、聴覚障害と視覚障害の二つのニーズを踏まえてプロジェクトを進めていく機会を、今後、もっと増やしていくことが重要だと思います。

副音声・活弁を、もっともっというんなジャンルの映画で聞いてみたいのです。盲ろう者にとって、まだまだ映画というものは手に届きにくいものです。でも、通訳者を連れて映画館に行きたいと思っている盲ろう者も実はいる、ということをお忘れはいけません。

山上

映画の作り手として、映画というものにとって大事なものは、情報ではなく、体験だと思っています。映画を観るということは、ある種の体験なんだと思います。まず、映画の体験をすることを広げていくということがとても大事なんだろうなと思っています。





びわこアムニティー バリアフリー映画祭2009

## シアタートーク①

### 「バリアフリー映画を

### スタンダードにしよう！」

【司会】 山上徹二郎 【登壇者】 佐々木亜希子(活弁士)、  
大和田廣樹(フロードバンドタワー会長)、東秀明(厚生労働省 情報支援専門官)  
【飛び入り】 赤松立太

● 山上 アムニティーネットワークフォーラムの併設の映画祭としては、アムニティーフォーラム時代から5回目になります。これまででは、バリアフリーではなく、このフォーラムに参加していただく皆様に、なるべく日ごろ観ることの少ない映画をご提供したいということから、毎回10作品ほどを上映してきました。今年の映画祭で初めて、視覚障害、聴覚障害の方々にも対応したバリアフリー映画を5作品上映しています。

同じ作品をユニテッドシネマ大津にて、さらに、3月13日から3日間、彦根市のビバシティ・ホールにて上映いたします。滋賀県が今年度の、障害者芸術文化祭の開催県となっております。その一環として、監督や出演者の皆さんにも参加いただくことになっております。

実際にバリアフリー映画の出来がどうか、これから1年かけて、全国の皆様に観ていただき、ご批評、ご感想をいただきたいと思えます。

本研究会の副委員長をさせていただいておりますが、通常は、映画のプロデューサーをしています。今回のバリアフリー映画5作品の内、「絵の中のほくの村」「花はどこへいった」「ぐるりのこと。」の3作品のプロデューサーでもあります。自分の映画を3本も、と思われるかもしれませんが、映画作品にはさまざまな権利が複雑に絡んでいまして、今回の研究会用に各製作会社から作品を提供してもらうにはまだ難しいところがあり、権利処理の難しさの点から、今回は自分の作品を選ばせていただきました。

大和田さんの「THE CODE/暗号」につきましては、大変

異例なことですが、一般公開前の作品を提供いただいています。またもう1本は、アニメーションをどうしても入れていきたいということがありまして、スタジオジブリの「猫の恩返し」を入れさせていただきました。

「バリアフリー映画をスタンダードにしよう」というタイトルで、この1年間の研究会活動の感想や反省点、ならびに今後の取り組みについて、議論していきたいと思えます。



山上徹二郎

● 厚生労働省の情報支援専門官として、視覚や聴覚に障害のある方のコミュニケーション支援にかかわる仕事をしています。バリアフリー映画の研究事業にも、オブザーバー参加をさせてもらっています。

障害者自立支援プロジェクトとして、様々な企画があがってきている中で、バリアフリー映画の企画を最初にみたときに、ただ単に字幕と副音声をつけるということではなく、この研究の中で、活弁士の手法をつかったり、今までにない取り組みになるのではということ、大変興味を持ちました。

参加して本当にびっくりしたのは、製作サイドの方、企画の方、そ

して障害当事者の方々が深くディスカッションされて、研究会の時間以外にも引き続き熱く語り合っている姿を拝見したことです。厚生労働省として、まず、映画製作に加わるということがないので、製作サイドの方にきちんとかかわっていたら本研究事業がすすめられていくということ、本場にうれしく思っています。これをきっかけに、もっともっと、製作者サイドと、障害者の方々が情報を交換し合う場が増え、今回の作品をより多くの方々に観ていただくことができれば、この研究事業の成果が増大すると考えます。



東秀明

**佐々木** 今回の5作品の副音声を担当させていただきました。大学を出て、NHK山形放送局のキャスターを三年間していました。文化、教育、福祉にわりと興味があつて、提案、取材から編集、そして台本を書くところまでかかわってそれらをお伝えする仕事をしていました。しかし、自分が取材してきたそれらの担い手になりたい、自分が主体になって別のことがやりたい、と思っている間に、活弁との出会いがありました。

日本の大事な映画文化、話芸文化であるのですが、需要がまったくない点ではこの副音声以上なのかもしれません。第一人者の澤

ができ、非常に勉強になっていきます。目指すところは、健常者も障害のある方々も、みんなが同じ映画を空間ごと、一緒に楽しめること、また、多くの作品をDVD等で個人で楽しめること。それぞれに対して、ソフト面ががんばらいたいな思っております。



佐々木亜希子

**大和田** ブロードバンドタワーの大和田です。インターネットデータセンター事業をやっております。インターネット系のコンピュータをお預かりして、24時間365日保守をし、世界中からのインターネットアクセスに対応できるようにネットワークを構築してお客様に提供しています。お客様のコンピュータをお預かりするというのは、受身的なサービスですので、こちらから発信するというサービスを考えようと、約6年前からコンテンツ、動画を配信するという事業に取り組むことにしました。実際にコンテンツをつくるということで、ネット用のドラマをつくる中で、映画関係者とも一緒に話をする機会が増えました。たとえば、携帯電話の小さい画面で、ハリウッド映画を観ようとすると観にくいわけです。表情もアップにしないとわからない、ということなどを経験しながら、映画監督の方とコンテンツの作成をしてきました。

登翠さんがいらつしゃいますが、最初やりたと言った時は「需要は全国で一人で足りている、なりようがないよ」と言われました。

しかし、昔の音のない世界に活弁をつけることによって、その当時を知るお年寄りの方から小さいお子さんまでが楽しめるのではないかと思えました。活弁士が台本を書くので、時代背景も入れながら、客層にあわせて面白く蘇らせることができるのではないかと思ひ、苦節8年、少しずつ開拓をして、あちらこちらの映画祭に呼んでいただけるようになりました。

そういった活動の最中、2年ほど前に山上さんにお声かけいただき、副音声の仕事の依頼を受けました。いろいろな世代の方々に活弁を楽しんでいただくように、目の見えない方、いろいろな障害のある方々に音声によって今の映画を楽しんでいただければいいなと、試行錯誤を繰り返しながら携わらせていただいています。

活弁は、観客が見えていることが前提で、シーンを解釈し、自分の主観も交えつつ、監督の言わんとするところを盛り込んで、一ひねりふたひねり味付けしながら、全体の作品の世界を語っていきます。副音声活弁の場合は、観客が見えていないことが前提なので、同時に、今、画面に映っている映像を伝えなくてはならない、今一瞬の画面に映る状況ならびに登場人物の行動を正確に伝えていかないといけないわけです。何を優先するかが難しい。

今まで、今回の5作品をはじめ、8作品に携わらせていただいているのですが、どれも、それぞれにいろいろな方々がかかわっていて、台本の作り方も違います。完成型は見えていないのですが、今回の調査研究プロジェクトでいろいろな方々のご意見を伺うこと

このように、ブロードバンドやネットでどういふことができるかという取り組みを続ける中で、シグロの山上さんと出会ったのですが、その山上さんが「映画をネットで観る時代が来る」と熱弁を奮うんです。私以上に。映画業界では珍しいというか、変わっています。その後、アムニティフォーラムの話聞いて、障害者の方々のコンピュータのリテラシーが非常に高いということも知りませんでした。また、コンピュータ周辺機器もそろっていて、視覚障害、聴覚障害の方々が、コンピュータをツールとして、いろいろ使ってらっしゃるということも知りました。

ブロードバンドが特性を持ってやれること、そのひとつに、バリアフリー映画との接点を見出しました。字幕とか副音声を入れるということについては、著作や権利の関係で簡単にはいきません。やれるところからやろう、ということ、シグロが著作をお持ちの作品を少しずつ、字幕を付けてネットで配信しようと、シグロシアターというサイトを作り、当社で行っております。

最初は、聴覚障害者の方々向けに字幕を付けることをしていたのですが、その後、視覚障害者の方々のために、副音声をつけていくことになりました。実際に、視覚障害の方々にお話を伺いますと、もう少し、臨場感にあふれる、とか、面白みのあるものを聞きたいといわれました。

すると、あるとき突然、山上さんが、「活弁士をつかってやろう」と言われるものですから、「佐々木さんに失礼ですが」活弁士なんているんですか?」と聞いてしまったくらいです。

最初の取り組みとして「ドルフィンブルー」という松山ケンイチ

くん主演の映画があり、DVD化する際に、佐々木さんに副音声を付けてもらいました。この映画は脚本からかわっており、また、ラフな編集のころから、何度も観ていたのですが、副音声を聞いたときに、「このシーンはこんな意図があったのか」と改めて気づかされたのです。

字幕を付ける作業に比べて、ワンシーンでも、情報を選んで説明しないといけない、どの部分を音に変えるのか、役者さんのしぐさなのか、背景なのか、というところを、佐々木さんの感性で、説明してくれるのですが、これは別な作品ができたな、と感じました。副音声だけで聞いたとき、自分が長く携わってきた「ドルフィンブルー」という映画が、ある意味、別な映画になったと感じたのです。

このように、細々と、ブロードバンドタワーとシグロさんとやってきて、マンパワー的にも、費用的にも大きな課題がある、と思っていた矢先に今回の研究事業がはじまりまして、良かったです。また、非常に喜んだのは、委員の方にもいろいろな方々に、ご参加いただいているということです。今までは、ご意見をいただいても、次の作品に活かしていこう、ということになるのですが、今回の作品はフィードバックをいただきながら、じつくりと（といってあまり時間はありませんでしたが）反映をさせていただきました。

私も、郵政省（総務省）や内閣府の研究会にも出てきましたが、今回の研究会で、非常に面白いのは、研究会が終わった後も、このことで、いろいろなお話をしたり、飲みみについて熱く語り合っています。普通の研究会であれば、さっと集まって、さっと解散なんですよ。

びに新しい発見があるということも再認識しました。今回、特にアニメーションが大変だったのですが、聴者として自分たちが普段観ている時には気付かなかった、無数のことに気がつきました。何が大変かという点、キャラクターデザインの口の動きが小さく、映像画面だけを追っていると、誰がしゃべっているのかわかりづらいのです。そこで、この作品では、字幕の位置を話者に合わせて動かすという方法をとりました。観る人の目の動きも少なくてすみます。僕が知っている中ではじめてのことです。

アニメーションの場合は、声優さんのキャラクターが非常に強く出ていて、耳で聞いている場合は、誰が話しているか分かるんですが、音を消してみるとわからない。森田監督とスタジオでも面白い意見交換ができ、監督も、今度は台詞のない映画を作るのかな、とおっしゃっていました。

今まで、気をつかいながらやってきたことが何であったのか、再発見ができる面白い機会であり、聴者の立場から情報を伝えてやるんだという気持ちから、音のない世界を前提として、文字による画面の情報提示が作品世界をつくるんだという考え方にシフトする必要があると感じました。

僕たちの作業の中では、いかに文字が読み取りやすいかを心がけ、文の分割、スペーシング、漢字の使い方に気をつけてきました。こうした字幕の作業の90%ぐらいは、誰がやっても大きく変わらないかもしれないですが、残り10%ぐらいは微妙な表現の骨格に絡む部分があり、そのあたりで今回の発見を活かしていきたいと思えます。

が、様々な方が集まっているということもあり、面白いんですね。個人的にも勉強になるし、新しい発見がたくさんありました。



大和田廣樹

**山上** 飛び入りですが、今回の議論に会場から赤松立太さんに参加いただきたいと思います。研究会の中で、聴覚障害者用の日本語字幕を付ける作業をしていただいたのですが、自己紹介と感想をお願いします。

**赤松** 映像翻訳の世界で主な仕事をしております。

聴覚障害対応字幕、というのは、今までは、台詞をすべて書き起こしてそれを画面に表示し、効果音、音楽など聴覚として伝わってくる情報を付加的に伝えていくという考え方です。今回の製作を振り返ってみると、実は映画の画面の中に入っている音というのが、意識的なもの意識的でないものと二通りある、ということを再認識できたことが私自身の収穫の一つだと思います。

単に音が聞こえないから、わからないから出していこうということからスタートしたのですが、音がないということも前提に作品を見直し、考え方を切り替えていくと、映画というのは観るた

**山上** 映画の上映パターンとして、副音声のみのバージョン、字幕のみのバージョン、そして情報過多になるかもしれないませんが、両方の入ったバージョンを体験していただけるようになっております。それぞれのパターンを皆さんにも体験していただき、ご感想をいただきたいと考えております。

**大和田** シグロシアター <http://www.cine.jp/index.php>  
シグロシアターでは、リアフリーを目指した動画配信を行っています。より多くの皆さまに快適に映画を楽しんでいただくため、各作品に字幕版をご用意しています。副音声版については、現在準備中です。

今回の5作品についても、元々、リアフリー映画にしようというのでつくられたわけではないので、向き不向きはあるとは思いますが、

今回の研究会の中でも多く出された意見なのですが、障害のある方が映画を観るタイミングというのは、健常者に比べて遅いということ、THE CODE/暗号につきましては、これから公開になるのですが、できるだけ、新作品が同じタイミングで観ることができるということに意義があるのだと思ひ、私のプロデューサー作品ということで出させていただきました。

また、THE CODE/暗号は、5月9日からの公開なのですが、一般公開に先駆けてのプレイベントとして、佐々木さんのライブを企画しています。公開後は、映画館だけでなく、全国各地の公的施設等でも上映をしていきます。これらを通して今後、製

作会社、映画関係者に対しても、字幕、副音声を推進する活動を継続的に実施していきます。

問題提起として、劇場でやるにはハードルが高いということも含め、上映場所の問題があります。公的施設の有効活用ということで、岐阜県で上映したことがあります。公的施設で設備が整っているところも多く、活用が可能と思われます。現実にはシネコンが増えているのですが、シネコン以外の劇場は減っており、ハリウッドもしくは大作といわれる邦画以外は上映されない傾向にあります。しかし、邦画だけでも年間400本が製作されていますが、あまり日の目を見ないでお蔵入りしてしまう作品もあります。これらも、公的施設を使って上映していけばいいと、個人的には思います。

また、別の問題として、フィルムをかける映写機のスペースと、技師が必要になるために公的施設での上映が困難であるという実態もあります。ハイスペックなパソコンとプロジェクターで上映することもできます。ただし、パソコンの取り扱いについて不安な部分が多いという地元の方の声もありますが、ブルーレイの出現により十分に高画質の上映が簡易型の装置で可能となりますので、今後、拡大できると思います。

宣伝等についても、岐阜県の場合は、自治体と地元のNPOとでやってもらったのですが、監督や役者さんにも登壇してもらい、ライブ感も感じてもらえたと思います。今後も佐々木さんにもお会いいただき、副音声活弁をライブでやってもらうこともお願いしたいと思っています。実はそのことが、いい宣伝方法だったり、集客につながります。

らうことはとても有用であると思います。厚生労働省としても、それらを、広く一般の方に広げていく、普及啓発にかかわらせていただくことになると思います。

今回、せっかく調査研究でできた作品を、他の製作者側へのアピールとして使わせていただくことも含め、まずは、啓発をすすめていければ、と思います。

**山 上** いわゆる調査研究という事業内容から、製作だけで終わるというのではなく、障害のある方ならびに一般の方々に観ていただき、批判や評価を含めてそのアンケート結果をデータとして整理していくということも研究会の大きな役割だと考えます。今回は作品製作がメインでしたが、引き続き次年度も各地での上映会ならびに、シンポジウム等を通して多くの方々にバリアフリー映画に接していただきたいと思っています。その際、単なる映画上映だけでなく、佐々木さんに副音声ライブをやったことで、障害者と健常者が一緒に楽しめるライブ空間の提案も可能になると思います。

**東** つくるということだけでなく、それはスタートラインです。で、それらをスタンダードにしていくための仕組みづくりは重要であると認識しておりますし、行政側として、手助けできることはさせていただきます。

(財)全日本聾唖連盟が「ゆずりは」という映画を製作されましたが、この映画も、ぜひ多くの方々に観ていただきたいと思っています。

バリアフリー映画をスタンダードにということでは、バリアフリー対応の費用が出れば、つくり手としては、多くの方に(障害のある方を含め)観てもらいたいという考えですので、上映回数を増やしていくことで、バリアフリー対策費用が捻出されれば多くの作品がバリアフリー対応になっていくと思います。

**山 上** 今回のバリアフリー版製作では、各作品の監督やプロデューサーに積極的に参加していただき、「作り手の個性を反映させたものになりたい」という考え方をスタンダードに考えました。今回の5作品を本当に楽しんでいただくのは、これからにかかっていると思います。完成しただけでは終わらないのが映画でして、配給し、上映して、実際に多くの方々に観ていただくことで、はじめて映画が完結します。とりわけ、今回の5作品についても、実際に多くの方々に観ていただき、評価していただくことが大切です。今回の5作品の上映を通して、その成果を確認していくことが、バリアフリー映画をスタンダードにしていく上で大切だと思います。

**東** 聴覚障害の方への情報提供施設が各地にありますが、そこから字幕を付ける作業をしていたくにしても、実際の映画を観ていたくまでには、時間的ずれが生じてしまいます。

障害者の方々に対して、アクセスできる機会が保障されていないのが現実です。一方で障害者権利条約における情報アクセシビリティの観点からも、重要なことであることは認識しております。製作者サイドの方が、つくる段階から、そこに意識をおいても

世の中をバリアフリーにしていきたいときに、様々な団体が結束して声を上げることによって福祉制度につながってきたわけですが、団体として、当事者同士のみで活動するのではなく、今後は、一般の方々にも理解してもらえらるような活動の方法とすることを目指す必要があると思います。同様に、今回のバリアフリー映画をスタンダードにしていく、また、障害当事者が製作にかかわった、いろいろな映画作品があるということを確認してもらえればいいと思います。

**佐々木** バリアフリー映画がスタンダードになっていくべきだと思っておりますが、その資金をすべて行政側をお願いするわけにはいかないので、製作の段階からバリアフリー映画作品として製作するコストを入れ込むということができればいいですね。また、通常上映の中の、1日1回や2回は、バリアフリー版の上映をしていくとか。

今回、副音声台本の作成に監督が入ることによって、監督の作品にこめる想いや意図が伝わってきて、出来上がった作品を改めて観るとまた違った感覚が楽しめました。副音声で、別の楽しみ方ができるということは健常者にとっても面白いと思いますし、最初からそういうふうにつくっていく、というふうには製作者サイドが考えることができれば、映画の可能性も、もっと広がっていくと思います。また、副音声は、視覚障害の方だけでなく、知的障害の方にもきくと、わかりやすさの点では有効であると思います。障害者側の需要も増えて、「障害のある方々でこれだけの人が映画を楽し

みにしているのだから、ある意味、市場の拡大にもつながる」と製作者サイドが気づいてくれればいいですね。

私自身がNHKのキャスターをやめて映画の仕事をするようになったことのきっかけのひとつに、虚構の中の真実に気づいたということもありました。事実を伝えることも大切であり、必要な仕事であるけれど、たとえば、映画の虚構の中に真実があったりするわけですよね。大事な事に気づかせてもらったり。それが得られない、楽しめないということは、もったいないということを強く感じます。そういうことを障害のある方々とも分かち合いたいし、それらを理解しつつ、製作側も過程を楽しんでいけたら、と思います。

**大和田** つくる側としては、新しい発見がたくさんあり、障害者の方を意識してつくるということは、おもしろいと感じました。あまり細かく気にしすぎなくてもいい部分があるかもしれないけれど、最終的には、つくり手が何を伝えたいか、というところに帰結するまでのプロセスを、障害のある方々と共有しながら、また、それぞれの立場を尊重していくということは大切だと思いました。

聴覚障害の方が、映画は、外国の映画しか観ない、理由は字幕が付いていないから、ということも妙に納得してしまいました。今までは、気に留めることもなかったのに、今回の研究会に参加して、ひとつの障害種別の中にも、様々なグラデーションがあるということも、改めて認識させられました。

今後、ブロードバンドを活用していく上で、個々で楽しんでいただけでなく可能になりますし、先ほどお話した、公的施設を利用す

るにしても、ダウンロードしていただいてから観ていただくことも、将来的には可能であろうと考えます。さらに、障害施設単位でダウンロードしていただき、個人で楽しんだり、一緒に楽しんだり可能性は広がり続けると思います。

**山上** 今後、この5作品を多くの方々に観ていただくこと自体が、バリアフリー映画をスタンダードにしていくことにもつながると考えております。

本日は、ありがとうございました。



第1日目  
2月20日(金)

12:30~14:22  
絵の中のぼくの村

14:45~16:00  
猫の恩返し

16:15~18:35  
ぐるりのこと。

18:45~19:56  
花はどこへいった

21:30~23:34  
THE CODE / 暗号

第2日目  
2月21日(土)

08:30~09:45  
猫の恩返し

10:00~11:20  
シアタートーク①

11:30~12:41  
花はどこへいった

14:00~15:20  
シアタートーク②

15:35~17:45  
絵の中のぼくの村  
\* 東陽一監督挨拶あり

17:55~20:15  
THE CODE / 暗号  
\* 林海象監督挨拶あり

21:30~23:50  
ぐるりのこと。

第3日目  
2月22日(日)

08:00~09:11  
花はどこへいった

2009年2月20日(金)~22日(日) 大津プリンスホテル本館2F「比良」  
びわこアムニティーバリアフリー映画祭2009 プログラム

## シアタートーク②

### 「」のたび製作した

### 「」のたび製作した

【司会】高木啓伸(日本IBM) 【登壇者】山上徹二郎(シグロ)、  
井野秀一(産業技術総合研究所)、福島智(東京大学先端科学技術研究センター)、  
中野聡子(東京大学先端科学技術研究センター)、浅川智恵子(日本IBM)

**山上** シアタートーク②では、1年間かけて実施してきた研究会の中で浮き彫りになった問題点、また、今後の可能性について議論したいと思います。

研究会に参加していただいた方々もこの会場にいらっしゃいます。東京大学先端科学技術研究センターの大河内先生、活弁士の佐々木亜希子さん、副音声および聴覚障害者用の字幕製作にも直接かかわっていただいた「絵の中のぼくの村」の監督の東陽一さんにも参加していただいております。

**高木** 打ち合わせのときに、皆さん、積極的に発言をしたいとのこと、どなたも司会役がいらつしやらないということで、ピンチヒッターで引き受けております。それでは、井野先生から、お願いします。

**井野** 所属は産業技術総合研究所です。名前は硬いのですが、取り組んでいることは皆さんと一緒に、福祉に係わるやわらかな工学研究をしています。

元々は北海道大学で、人間を支援していくシステムの研究をしていました。医療系の人たちと一緒に研究をしたり、いろいろな生物のいるところを機械に置き換えるという、生体工学の研究をしてきました。その後、東京大学へ移りまして、生活環境について情報バリアフリー、ユニバーサルデザインということで、文理融合の福祉工学を模索してきました。

研究テーマは触覚、視覚、聴覚と多方面にわたります。今回は、映画の字幕をどうするか、ということのアミニティを模索し、広い意味での福祉工学を考えるということに参加しています。

**中野** 東大先端研で、聴覚障害者のための音声認識技術を利用した字幕呈示の研究に従事しております。心理学的な立場から、どういった字幕の呈示方法が聴覚障害者にとって読みやすいかという研究をしています。

私自身は5歳のときに聞こえなくなりましたが、一般の学校に通い、大学入学後に手話を学びました。

私の子供のころは日本映画に字幕はついていませんでしたので邦画を楽しむことはできませんでした。ここにいらつしやる、ろう者の方も同じだと思います。その後、DVDが普及するようになって、ろう者も字幕つきで見られる邦画もできました。





この研究会では、ただ字幕をつければよいということではなく、より楽しめるための字幕のつけかた、あるいは、字幕以外のほかの方法を組み合わせて、一般の人と同じように聴覚障害の人たちも映画を楽しめる方法について研究することです。ぜひ、私も参加させていただきたいと思い加わりました。

**浅川** 日本IBM東京基礎研究所の浅川と申します。自身も視覚障害ということもあるのですが、入社以来、視覚障害者を支援するという目的で、様々な視覚障害の支援技術の研究を行っております。入社してはじめて取り組んだ仕事が点字のデジタル化で、全国の点字図書館で利用されているナイーブネットの前身である点訳広場を開発しました。

その後、さまざまな日本語の問題に取り組んだ研究をしていましたが、1997年にインターネットのすばらしさ、可能性を感じ、今後、障害者の新しい情報源になると確信し、研究のフォーカスをインターネットに向けてきました。

はじめに開発したのが、IBMのホームページリーダーです。これは日本で開発され世界11カ国の言語に対応したソフトとして約10年間利用されてきました。(1997年の開発後、WEBが非常にデジタルなものになり、様々なマルチメディアコンテンツ、視覚情報が増加してきました。そういった視覚情報であっても、非視覚的に必ずアクセスできるはずだと様々な観点で研究開発を行い、健常者の方々が作るページが視覚障害の方のためにわかりやすいかどうかを検証するツールの研究も行っています。

見ました。ヒッチコックの映画とかも見た記憶があります。

有名な映画でも、60年代のダスティン・ホフマンの「卒業」とかは、見えなくなってから、聞いたのです。状況説明がよくわからないときには、隣の部屋にいる兄貴を呼びにいて、「今これ、なにやっている？」と、声が聞こえなくなったら「どういうこと？」と聞くと「これは、ラブシーンだ」と。そのあと、聞こえなくなってから、1982年に、「ET」という指先でさまざまな生き物に触ってコミュニケーションをとる宇宙人がでてくる映画ですが、映画好きの兄が、「おまえ、ETみたいになってしまったな」といっていました。今回、このプロジェクトにかかわらせていただき、いわゆるシナリオ的なものから佐々木さんの活弁のデータ、聴覚障害向けの字幕の擬音のデータを拝見して、小説を読むのとは違う臨場感、醍醐味を味わった、と感じております。

**高木** この研究会にかかわっての感想、課題等についてお話をお願いします。

**井野** この研究会に最初から参加していて、映画ひとつをとっても、いろいろな感覚の使い方があっていいことを知りました。また、活弁によるライブの副音声の体験では、監督はこのシーンをこういふふうを考えていたんだとか、草や木の名前がこういう名前だったのか、と新たな発見がありました。一方、音声ナレーションの多いドキュメンタリー作品に副音声を重ねるのは難しい、逆にスリ

急増していますマルチメディアコンテンツに、こういった副音声をつけたいか、また、すばやくアクセスするためにどうすればいいかということもここ数年考えていましたが、そんなときに、バリアフリー映画の研究のお話をうかがい参加させてもらいました。これは非常に「スペシャルな」副音声だと思えます。映画のアクセシビリティについて議論できることを楽しみにしています。



浅川智恵子

**福島** 私も、東大先端研のバリアフリー分野におりますが、何が専門かといわれると答えにくい、何でもやっている雑貨屋のような、スーパーマーケットのような感じですが。私自身、目と耳に障害があります。ご承知のように、映画は観て、聞くメディアですよね。その映画に見えなくて聞こえない私が、なぜ、ここに呼ばれているのか、いまだによくわからない、どちらかというと、自立支援法の方が向いているのでは、と思っています。山上さんにはめられたか、北岡さんにだまされたか、もしくは触発されたか？

ちなみに映画との個人的な接点でいえば、9歳で見えなくなっていますので、有名な映画でいうと40年ほど前に「猿の惑星」というのがありました。地球が進化した猿にのつとられる、あれは目で見ると感じました。字幕に関しては、時には映像が隠れてしまふので邪魔になると感じる人もいるのではないかとも思いました。さらに、高齢になってくると、抑揚のない声や高い声は聞きづらくなりますが、副音声を工夫してつけることでどうなるか、ということの人間科学的な視点での表現の可能性についても感じています。

**中野** 今回、5つの作品が上映されていますが、特に「猫の恩返し」「THE CODE / 暗号」の2作品について詳細に字幕を拝見しました。皆さんはこれらの作品の字幕についてどう思われましたでしょうか。私はこれまでの映画やテレビの字幕の付け方と大きく違うと感じました。特に擬音を字幕化していることに特徴があったと思います。これにより、聴覚障害者に映画の中の環境音や音楽などの音も文字にして楽しんでもらうのはとてもおもしろい試みだと思いました。

私は心理学の専門ですが、人間の脳における言語処理というのでしょいか、映画の中の音を文字化したものと実際の文脈とのズレに興味を持ちました。字幕の擬音語をみると、ちょっとびくびくすることも多くあったんですね。

たとえば、「THE CODE / 暗号」のビルの爆破シーンでは、字幕は「ドッカーン」となっていました。ちょっと、こけてしまいました。映像ではビルが大きく崩れ、うわっつと息をのんで見るようなシーンなのですが、映像と擬音語のギャップがあり、映像の迫力が損なわれてしまっていました。

「猫の恩返し」のお菓子を食べるシーンでは、小さいハルがお菓

子を無心に食べるかわいらしさを感ずるところなのですが、(むしゃむしゃ)の擬音語が入ることで、そのイメージがかなりズレてしまいました。文章だけ読むと餓鬼になってがっついていてるような印象に変わっていったんですね。擬音語の字幕化の難しさが課題だと思えます。

音楽に関する情報もできるだけ字幕化して聴覚障害者の人に伝えたいと製作側の人たちは考えていらっしやるのですが、入れなくてよい部分もあるのではないのでしょうか。あえて字幕化しないということもあっていいと思います。「花はどこへいった」のヘビアーノのやさしい音の表現は、聴覚障害者は音楽を説明されてもピンとこないため、健常者のように(へ)のような音と言われてもわからないのです。

逆に、健常者が楽しんでいる音楽とは全く別ものですが、聾者であってもリズムで音楽を楽しむことはできます。字幕を利用してそれを行うことも可能ではないかと考えています。例えば、「猫の恩返し」の猫の行進のシーンで、笙の音の(フアー)とか鈴の音の(シヤラン)という字幕呈示のタイミングによって、行進中のにぎやかな昂揚した雰囲気や聴覚障害者にもわかる、ということはあると思います。

また、今回はコミカルな作品はなかったのですが、擬音語の使い方や笑わせるようなシーンでの(ブツ)、(バタン)などの表現は使えろと思えます。例えば「有頂天ホテル」のようなコミカルな映画では(笑)で表現されるのではなく(ブツ)とかの表現でもいいなと感じました。

今回やってみて、音楽が鳴っているということだけを伝えるだけでなく、形容詞に作り手の意図があり、どのような音楽なのかということの、「どのような」にこだわりました。

福島先生との議論で、副音声や字幕をつけることで、いったいどこまで映画を伝えることができるのかという試みの中で、スタンリーキューブリックの「2001年宇宙の旅」という作品について話題になりました。キューブリックの映画は、健常者にとっても難しい映画ですが、キューブリックの他の映画作品を何本か観ることで、よりよく理解できるかもしれない、というようなことをお話ししました。映画の受け取り方は、障害のあるなしにかかわらず人さまざまである、ということの基本に、間違いも批判も承知の上で、いろいろ試行錯誤することができたと感じております。

もうひとつの技術の焦点、副音声について、浅川さんからお願います。



山上 俊二 浅川 俊二

浅川 俊二 とりあえず、スペシャル副音声と呼ばせていただきます。私も、中途失明で、中学生くらいまでは普通に映画、テレビを観ていました。失明後は、「卒業」とか、「ゴーストバスターズ」とか、い

一つ一つのシーンを考えながら、効果的な字幕作成、しかも製作者、監督さんも加わっていただくことは、ろう者の立場からは喜ばしいことです。



中野 聡子

山上 俊二 「THE CODE/暗号」の擬音については、林監督の「劇画調」の音を感じてほしい、ということ本人の選択でやってもらっています。「猫の恩返し」につきましては、森田監督が、作品を新しく作り直すくらいの気持ちで取り組んでいただきました。

従来の聴覚障害者用の字幕を継承するのではなく、作り手である映画監督の個性と感性を前面に出してやってみたというのが今回の試みです。

音楽について、「やさしい音楽」「流れるような音楽」というような表現が耳の間こえない人には伝わりにくいというのはいくぶんわかりますが、今回あえてやってみたかったのは、映画を作る側の人間の、映画音楽における製作意図というものを少しでも伝えたいということ、中野さんのご指摘を受けながらも、あえて入れてみました。最初からなければいいのか、というのではなく、とりあえず試みてみたかったのです。

いろいろな映画を観てきましたが、英語の映画については理解できないのは仕方がないと思っていました。

日本語のドラマや映画に関しては、そこまで不自由を感じていなかったのですが、最近になってわかりにくいと感じることが多くなりました。最近のドラマは会話が減っていると思いませんか？ 周りに聞くとすごく嫌がられます。映画館では、説明を聞くのは気が引けて、ついつい聞かなくなります。NHKのドラマとか時々副音声がついていると、副音声があるほうがいいなと感じていました。

この研究会の中でスペシャル副音声の映画(絵の中のぼくの村)を初めて体験しました。ラッキーにも佐々木さんの副音声ライブを渋谷の試写会で観させていただきましたが、とにかく、最初は驚きました。今までの映画とは違って、慣れるまでは違和感を感じました。だけど、わかりやすい、佐々木さんも映画の一部であるという気がしました。

「THE CODE/暗号」と「猫の恩返し」をこの映画祭で観て改めて思ったのですが、ひとつひとつの映画の始まりは、まず、不思議な感じがします。おそらく冒頭に説明が入りますので普段の映画を観始める感覚とは異なるためだと思います。

スペシャル副音声を聞いていると、いかに、私が視覚的に表現されているな情報を逃していたのかが良くわかりました。なんとなく、ストーリーはわかるけれども、時には半分も理解していなかったのではないかと非常に考えさせられました。

私は「ハリーポッター」が好きなんです。目を閉じていただけ

れば、わかると思うんですが、戦っているシーンとか、よく分からないものです。あるとき、音声で録音された書籍を借りて聞いてみたんですが、その結果、本を読んだほうがよっぽどよかったという経験をしました。それと同じことだと気づきました。

具体的に細かい話になりますが、今回は、製作者の方々、監督さんをはじめとして、何を、この映画で伝えたいか、ということを深く議論していると感じました。

たとえば、「THE CODE／暗号」の中で、つばさのひろい帽子をかぶった椎名という説明があるのですが、後半になってくると、つばさのひろい……というところでドキッとします。最初のときには気づかなかったことが、同様なことが蘭でもいえますね。

最後に、美蘭が死ぬところで「蘭がみえるだろ」と507が言うのですが、ちょうどいいところに蘭が咲いていたと思っていたのですが、実は、空想の世界であったということがあとで説明があるわけですが、視覚障害者ももちろん、空想できるわけですが、このように視覚的表現を視覚情報なしで表現することで今後、物語の世界感に対する理解や没入感が深まっていくのではないかと感じました。

「猫の恩返し」では、主人公のハルが、ひげが伸びるこの説明が加わるのですが、ただ面白いから伸びたと笑っているだけで、本当に、製作者、監督さんが、ハルの心とひげの長さをつなぎあわせているということが（晴眼者にも）本当に伝わるのかな、と疑問を持ちました。もしかしたらこういう副音声は、こどもとか、お年寄りとか、知的に障害のある方にとっても、理解を助けることができる

確かに元の作者の意図を捻じ曲げかねないということとはわかりませんが、ゼロでいいのか、何も伝えなくていいのかという問題があります。点訳者なり、通訳でも同じですが、完全に客観的に伝えることは、そもそも原理的にできないのであって、ある解釈を含めた表現になるのは仕方がない、仕方がないというか当然のことではないかと思えます。これまでの副音声はどちらかというところ、なるべく客観的に、なるべく短く、なるべく中立的にと言う発想や原則があったんだと思います。

今回の佐々木さんの副音声、浅川さんのいうところのスペシャル副音声ですが、解釈を入れていません。製作者側の意図、ねらいも踏まえておられるかもしれませんが、仮に踏まえていなくてもいいと思います。佐々木さんが自分の名前の責任において伝える、ユーザー側はそれを前提にしつつ説明を聞くということ、問題はクリアできているし、独自の表現ができるわけです。

「THE CODE／暗号」でいえば、ものについての説明もユニークですね。たとえば、ガラスの筒に入った爆弾が出てきますが、従来ならば、ガラスに入った爆弾がある、とか青く光るガラスがある、という表現だと思いますが、佐々木さんは、「稲妻のように青光りするガラスの筒がひとつ」という表現、非常に鮮やかで詩的な表現をなさっています。

さきほど、山上さんは、単なる音楽よりも、「優しい音楽」という表現のほうが善いのでは、とおっしゃいましたが、そのように思い入れがあるのであれば、もうちょっと工夫して、優しいというよりも、もう少し芸術的な表現を見習っていただきたい。（会場からの笑い）

かも知れません。

「THE CODE／暗号」の銃撃戦については、あんなにリアルに説明されて、初めての体験でした。007などこれまでよく分からなかったアクション映画も観てみたいので、山上さん、ぜひお願いします。

このスペシャル副音声については、たぶん、視覚障害者だけが対象ではないと思われれます。バリアフリー、ユニバーサルデザインというのを目指しているのではと。こういう、スペシャル副音声のひろがりに期待します。

**高木** それでは、福島先生、お二人のご意見を受けて、お願いします。



**福島** 映画の話の前に一言、私、普段、点字で読書をするのですが、どうしても読めない本があります。それは、漫画です。漫画が読めない。絵が見えないので仕方がないのですが、点字翻訳する方が注釈をつけてくれたらいいですよ、と言ったら、皆さん嫌がるんですね。点訳者の主観を入れたらいけないという原則があるらしくて。

単なる日常的な表現を超えた詩的な表現をあえてする、ということに、おもしろさがあります。主観的な表現を避けて無味乾燥な表現をされても面白くありません。人によって感想は違うかもしれないけど、視覚障害者側もわかった上で、この「解説する人」の解釈だとわかった上で、映画を観賞するわけですね。ニュースだってそうですよ、テレビ局や新聞社によって伝え方が違います。表現について真実はひとつしかない、ということはないわけです。

佐々木さんの説明は、ものに対する説明だけでなく、人に対する描写もあります。例えば美蘭という女の人が、舞台上で歌っているという場面の説明があります。「女王のようで、時に高貴で、時に蘭の花のように儂い」という表現をされています。この「儂い」という表現が後のストーリーの伏線にもなっていますよね。また、ものとの両方をカバーしている描写もあって、上海にやってきた探偵が、黒い帽子と黒い背広を着ていて、そのいでたちが街にまったく馴染んでいない、という表現をされます。「馴染んでいない」というような感覚は、抜け落ちがちな情報で、ものと人との相関関係を入れていくということも画期的だと思います。ここまででは、褒めておくということ、以上です。

**山上** 「THE CODE／暗号」という映画は、林監督に関わっていただきましたが、副音声の脚本は玉井夕海さんに書いていただきました。（今日、会場においてです）

**福島** とてもすばらしい、あなたは、詩人です。

**五井** (フロアから) ありがとうございます。

**山上** 今回の5作品は、いわゆる共同作業で作り上げてきました。監督自らが自分で書くというケースから、脚本家に加わるケース、それに監督が手を加えるケース、様々ですが、芸術的要素の高い表現は、監督や製作者側がかかわっているからこそ表現できたことだと思います。

「花はどこへいった」に関しては、かなりの部分を製作側が進めたのですが、ドキュメンタリーということもあって、難しいことが多かったと思います。次は音楽の表現をまじめに考えます。(笑)

**高木** ここで、フロアにおられる、東大先端研の大河内さん、お願いします。

**大河内** バリアフリーに対して福島さんがスーパーマーケットなら、私は駅の売店というレベルの仕事をしています。

今回のスペシャル副音声ですが、便宜上は、副音声活弁とよんでいくんですよね。

私がかかわった、副音声については、玉井さんの話は、本当の話で、一週間くらいで仕上げられたんですが、いろいろな言われながら、相当悩みながら、絶対譲らないところがあって、最終的に変わらない、ということもあって、情緒的で、芸術的なものに仕上がっていったんだろうと、副音声作成時に合った脚本側の意図、こだわりが映画の根幹になっていったのだと思います。

ことで新たなバリアをつくってしまうということもあると思います。見えて聞こえている人がご覧になれば、副音声、字幕両方が付いている映画は、うるさい、情報過剰映画であると思います。

もちろん、副音声や字幕の本身そのものが適切かどうか、あるいはより豊かにするにはどうすればいいかという工夫は今後も必要ですが、それと同時に、一般の観客とともに楽しむということ、まさに同じフィルムから楽しむのか、それとも同じフィルムをベースに、視覚障害者はFMラジオ等で、陰で副音声活弁の部分の聞こえて、聴覚障害者は、オプションで何がしかのテクノロジーを駆使して、字幕のおまけ、追加されたものを見るところ、選択的なものを、今後模索する必要もあるんだろうなと思っています。

本日は話が合ったような、製作側がコミットする、また障害のあるユーザーもかわりながらともに作っていくということが、新しい映画の可能性を生み出すと思っています。厚労省の東さんがおっしゃっておられたように、障害者が作った映画、障害者側からの発信も始まっていますので、製作側そのものに障害のある人がいるということもあるかなと考えます。ただ、根本問題としてシビアナ問題をいえば、音楽は聞こえない人間にとっては結局わからない、映像は見えない人間にとっては、見える人のようには絶対わからないのです。どう逆立ちしても、どうがんばってもそれは究極的には分からないのです。かつて、見えて、聞こえていた私だから、実感をもって言えますが、それは、ことばでは置き換えられないものです。完全な、あるいは単一のゴールがあるという幻想を思い描いてはいけない、ゴールはないんです。どんどん近づいていくという

また、「猫の恩返し」で、浅川さんが気付かれましたが、「ハル」が猫化すると、ひげがのびたりするんですが、副音声のときの主人公の呼び方が変わっているんですが、「ハル」、「猫ハル」と変化しており、森田監督がものすごくこだわりました。

監督はハルが自分の時間と自分の生活を失ったところを「猫ハル」と、あえて表現されそれが、人間社会に戻ったときから「ハル」と、場面の転換を非常に上手に表現されていて、これは、副音声としてだけでなく、新しいもう一つの「猫の恩返し」が出来上がったと感じております。

中野さんがおっしゃっていた、優しい音については、聞こえる人にとってはわかっても、聞こえない人はわからない、という違和感も私も同感です。この取り組み自体がはじまったばかりだから、パワーバランスとして、ある意味仕方がないかもしれませんが、バリアフリー化ということで、今回、視覚、聴覚障害の方に観やすくした一方で、あえて言うところですが、このバリアフリー化から排除されてしまう方もいらっしゃるかと。

この部分は、福島先生のご意見も伺ってみたいと思っています。

**高木** それでは、福島先生、いかがでしょうか。

**福島** 「猫ハル」だけではなく、幼いころのハルを表すために、「子ビハル」もありましたよね、ユニークだと思います。大河内さんがいわれたとおり、バリアフリーがバランスを崩してしまうことがあったり、バリアフリーの限界があったり、バリアフリーをする

こともないんです。

別の道として、コンテンツを提供する、模索するという風に考えたほうが、新しい中身を提供することになると思います。これまでの映画を障害者にもわかるように提供するということを目指すこともですが、障害のある人ない人を含めて、いろんな人の間にあって、目に見えない壁を破っていくためのひとつの架け橋になれば、よいのだろうと思います。その架け橋はひとつではなく、方向や長さもいろいろあると思います。

「THE CODE/暗号」は面白かったし、ヤスパースのことばには感動しました。これを聞くだけでも、あの映画を見る価値があると思います。(こんなこといったら、悪いかな?もちろん、全体も面白かったです。)

**高木** 今後についての、可能性と課題についてお願いします。

**中野** 福島先生のお話にもありましたが、健常者が見て聞いているものとまったく同じものでなくてもいい、というのには同感です。字幕にしても、あえて音楽に関する解説はなくて「静」の中で映像をきわだたせて見せる方法もありだと思ったり、字幕表示のタイミングで新しい「音楽」を作ること可能です。ろう者にとつて、その映画がわかりやすく楽しくめるあり方を優先させることが大切だと思います。

感覚入力をつくろ組み合わせる方法もあると思います。例えば視覚と連動して振動も入れる。ただし、感覚の伝達にはそれぞれ

特性があることに注意する必要があります。たとえばボディソニックというのがあります。でもボディソニックで映画を観ても、ずっとお尻がむずむずと振動しているだけなんです。映画で振動を効果的に使うなら、やはり効果音のところだけといった限定的な使い方が必要だと思います。

それから、さきほど大河内さんがおっしゃっていましたが、映画のリアフリー化を進めようとするときには、やはり障害当事者の関与が大切だと思います。聴覚障害者へのリアフリー映画も、聞こえる人たちだけで作ることに限界があると思います。製作や字幕付与の段階で、ろう者が加わる環境が必要だと思っています。

**高木** 感覚代行などの研究の現状について(映画のリアフリー化への応用を視野に)井野先生、いかがでしょうか。

**井野** 多様なユーザが個人の好みに応じて情報の取捨選択をしやすくなるために、エンジニアが技術開発にどうかかわっていくのかが今後重要となります。これによって、映画のリアフリー化に用いる手段なども新しく変わってくるのではないかと思います。

例えば、複合現実感を利用してマンガの吹き出しのような形で台詞を空中に出してみるとか、バーチャルリアリティのヘッドマウンテッドディスプレイを装着すること等で解決できることもありそうです。これは感覚代行とバーチャルリアリティの新たな融合と言えるかもしれません。今後、リアフリー化で生じる

ち方ですが、それは、すごい発想であって、しんどい、大変な部分がある秘密の意味を考えるとですね。暗号は解けるかどうかかわからないのですが、暗号を解こうとすることが、私たち自身を解放していくということであり、リアフリーの映画の取り組みも、連続的に続く運動であって、ここまできたら終わり、というのではないので、それから、私たちにとっての「暗号」をみんなで一緒に解くように、協力していけばいいと思います。

私と山上さんでは解けないかもしれませんが、がんばっていきましょう。



山上智

**山上** せっかく作った映画なのでなるべくたくさんの人にご覧いただき、いろいろな感想を聞くことがこの研究会の最大の望みです。

会場の皆さんのお住まいの地域で上映していただき、皆さんの感想を寄せていただきたいと思います。その反応を確認することで、さらに進めると思っています。

本日は、本当にありがとうございました。

様々な呈示情報の相互的な葛藤についての解決を、エンジニアが真摯に担うことによって、映画を観ることのオルタナティブな選択肢が着実に増えていくと思います。



井野秀一

**高木** それでは、さいごに一言ずつお願いします。

**浅川** これからも、どういう副音声にしていくかという議論は続くと思うのですが、このスペシャル副音声があれば、「THE CODE / 暗号」も「猫の恩返し」も見ることがなかったと思います。製作にかかわったすべての方々に、感謝申し上げます。そして、「となりのトトロ」も是非観てみたいです。

**福島** 「THE CODE / 暗号」に出てくる、哲学者のヤスパースの台詞が、われわれにも当てはまると思います。

リアフリーの映画というのは、しんどい部分も、大変な部分も抱え込んでいるのですが、映画の中で主人公が紹介しているように、「人生における苦しみとか、極限状況にあるとき、私たちを超える何者か、超越する存在から暗号が届いているんだ」という心の持



# 映画のバリアフリーと 複合現実感ハードウェア の関係

独立行政法人産業技術総合研究所  
人間福祉工学研究部門主任研究員  
研究会副委員長  
井野秀一

最近、テレビや新聞でも紹介されるようになった情報メディア技術の一つに「バーチャルリアリティ」(Virtual Reality、VR)があります。

このVRを対象とする研究領域は幅広く、高精細な映像やリアルな音響はもちろんのこと、触覚・嗅覚・味覚を含めた五感を再現するハードウェアの研究、情報の受け手であるヒトの生理・心理特性に関する研究、そしてコンテンツ製作まで含みます。

それらの成果の一部は、コンピュータグラフィクス(CG)を利用した特撮やビデオゲームなどで身近に体験できるようになりました。デジタルシネマという言葉も生まれています。

その一方で、VR技術を深化させ、現実の世界にコンピュータで合成された仮想の世界を継ぎ目なくリアルタイムで融合する「複合現実感(Mixed Reality、MR)」という近未来的な研究が始まっています。

このMR技術は、自動車の安全運転のためのドライバー支援や外科手術支援など、高度な操作スキルが要求されるマンマシンインタフェース分野での活躍が期待されています。また、最近では、MRを題材に202X年の子供たちの世界を描いたアニメ「電脳コ

イル」も話題になっています。

しかし、MR技術の利用先は、高度な操作スキル支援に限られるものではありません。

そもそもMR技術とは、映像や音などの情報を、「仮想世界」という形で違和感なく自由自在に、ピタッと実世界に貼り合わせる技術です。

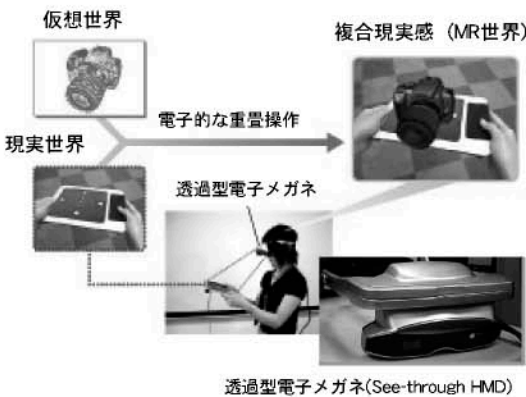
そのため、例えば、映画のように完成された作品に対して、元の作品自体には全く手を加えることなく、目や耳に障害を持つ人たちにとって大切な情報(副音声や字幕など)を当事者が選択権を持つ仕組みの中で提供することが可能になります。この場合、MRハードウェアによる字幕や副音声などの付加情報、スクリーン上の映画という一つの「現実」に貼り合わされた「仮想世界」となるわけです。

このようなMR技術による映画鑑賞の支援は、知的障害を持つ人たちの理解促進のための表現の工夫、子どもや高齢の人たちも一緒に楽しめる活弁などを取り入れた構成にも柔軟に対応できます。

こういった視点から眺めれば、MR技術とは映画のバリアフリー化をハードウェアからサポートするテクノロジーの一つであることに気づきます。

それでは、このMR技術は、今すぐにでも映画のバリアフリー化に利用できるのでしょうか？

残念ながら、現在の技術レベルでは、いくつかの課題があります。第1の課題は、空間的・時間的な「ずれ」を感じさせることなく、仮想の映像や音の情報を実空間に重ね合わせることです。第2の課題は、自然な装着が可能なウェアラブルなハードウェアの開発です。



このような挑戦課題を抱えつつも、透過型電子メガネ(See-through HMD)の開発や、ずれ解消のための空間センシングや情報処理の技術研究が、現在、行われています。また、実世界と仮想世界のずれに対する人体影響や、その軽減策を探る人間工学研究も医工連携で進められています。

これらの技術課題を一步步克服し、映画のバリアフリー化がMRハードウェアの伴走で実現することは、ある意味で歴史ある映画(映写技術)におけるパラダイムシフトです。研究者やエンジニアにとっては、共生社会とテクノロジーが幸せに遭遇する瞬間に立ち会うことを意味します。

そこにはアメニティーを大切にするモノづくりや共生へのヒントがある——そう私は考えています。

# 第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会 アートはポータレス 舞台挨拶

滋賀県大津市、ユナイテッドシネマ／滋賀県彦根市、彦根ビバシティホール

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会は、「アートはポータレス」をメインテーマに、平成20年5月から平成21年3月までの期間、滋賀県を舞台に行われました。「障害」の枠にとらわれず、人間本来が持つ普遍的な表現の力と、その芸術性・文化性を全国に発信し、人として互いに認め合い、高めあえる芸術・文化活動の環境を創造することを目的として、展開してきました。「アートはポータレス」には、二つの意味を込めました。ひとつは、アート間のさまざまなポーターを取り払い、境目なく共存しているというものです。また、二つめは、アートが社会をポータレスにしているのではない、という期待を示しています。

大会のオープニングは、これまでに障害のある人たちの表現活動(打楽器)に関わりのある和太鼓奏者・林英哲氏と滋賀県出身のティンパニ奏者・中谷満氏をお迎えして、和太鼓、打楽器の演奏に障害のある人たちの造形作品を映像で写し出すというコンサートでした。また、全国へ向けて造形作品を公募しました。応募総数は550名を超え、寄せられた作品は5000点を超えました。その作品は、絵画や陶芸をはじめ、クラフト作品や写真など、様々なジャンルの作品が届きました。これらの作品は、本大会の記念図録集としてとりまとめられましたが、この中から、滋賀県立近代美術館において、13名の作品による展覧会「独奏羅列」を開催しました。

一方、年間を通して、障害のある人たちの音楽やダンスなどのワークショップと造形活動のワークショップも開催してきました。歌ったり、踊ったりすることが大好きな人たちが集まり、音楽やダンスの専門家と一緒にワークショップを行ったり、美術を学ぶ学生が各地で開催しているアトリエに出向き、造形活動をサポートし、その活動の中から生まれてきた作品たちの発表会も各地で行いました。

そして、本大会の最後のプログラムとして、「バリアフリー映画祭を大津市のユナイテッド・シネマ大津(2月21日)3月6日、14日間)、彦根市のビバシティホール(3月13日、15日、3日間)で5作品をのべ38回上映し、2会場で1000人を超える方々に鑑賞いただき、多くの方からお褒めと、今後の活動に対する期待が寄せられました。



09.02.21  
大津UC

『THE CODE / 暗号』

林海象監督

今回かかわらせていただいて、副音声の台本や字幕の原稿をチェックしていく中で、バリアフリー化していくことは、とってもいい試みだと思います。映画っていうのは見えない方、聞く力の弱い方、どの人でも観ればいいと思います。映画はスクリーン



林海象監督

の本当の部分はどうかということが自分の映画をとおして分かったことですね。これは僕にとっていい経験でした。

徳永富彦(脚本家)

映画製作にあたって、色々なことを調べるんですけど、映画を作る上では全部は入れられないこともあって、裏側に隠れた所も今回の副音声や字幕で付け加えて説明していくことで観ることができると思っています。

また、国際映画祭とかに行っていて、いろんな言葉を持っている人に観せるんですけど、英語だったり、日本語だったり、フランス語だったり、そこに手話だったり、副音声だったり、活動弁士があったり、観た人の中で完成するので、観方は何でもいいと思います。それぞれ個々で完成していただければよいので、ぜひ楽しんでもらいたいです。

からの視覚的芸術ですけども、視覚だけではなく、音もあるし、五感を通して、物語が伝わると思うので、たくさんの人に観ていただけるといいのはおもしろいと思います。字幕も副音声も台本をチェックしたり、いじっている時は自分の映画をやり直すくらいの形でもおもしろかったです。

最初、目の見えない方に副音声で語ることががなかなかイメージできませんでした。イメージできるようになるには、自分で目をつむって自分の映画を聴いてみるわけです。そうすると、目の見えない人の世界観がやっと分かるんです。一方で耳が悪い方の字幕も最初はイメージできなかったんです。だけどそれをずっとイメージして、耳が聞こえない、聞こえにくいってことを考えると、だんだん世界が分かってくるんです。

その2つの作業が今回自分にとって、とても良かったことです。何となく気分では分かっているんですけど、そういう方たち



東陽一監督

09.02.23  
大津UC

『絵の中のぼくの村』

東陽一監督

この映画は終戦から2年後の高知の子どもたちを描いた映画ですが、昔懐かしい「ノスタルジー映画」というわけではなく、「過去の視点から現在を批判的に見る」と



左: 林海象監督 右: 徳永富彦

いうつもりで作った映画です。それが評価されてベルリンで銀熊賞を受賞したことをきっかけに、世界のいろいろな国で上映され、注目されました。

今回のバリアフリー映画祭で上映される機会に、この作品がDVD化されることになりました。当然、視覚障害者用の音声解説、聴覚障害者用の字幕を付けるわけですが、それは私自身がやらせて頂きたいと申し入れ、全部やらせていただきました。大変勉強になりましたし、興味深い仕事でした。

「一本の出来上がった映画に、後から副音声や字幕を入れるのはもう監督の仕事ではない」とは私には考えられません。一つの創造的な仕事なので、当然、監督が主導してやっていく必要があると思います。

でも、こういう風にすれば、健常者といわれる私が、視覚障害者といわれる人たちの感覚を想像して、映画を楽しんでもらえる音声を入れるか、また、同じく聴覚障害の人たちに対して、どういう文字を入

れていけば、この映画の台詞や音楽などを生き生きとお伝えできるのか、それらはやはり、やってみなくては分からない、ということになります。それで、いろいろと悩みながら、今日見ていただく作品に仕上がったわけです。

今回の上映では、バリアフリーということで、副音声での解説や、台詞や音楽や効果音を解説する字幕が入ったものを使うので、健常者にとっては、情報が多すぎて困るということがあるかもしれませんが、その点はどうかご勘弁いただきたいと思っています。

解説の音声は台詞とダブらないように入れてありますが、ときには、音楽や効果音の上に解説を乗せなければならぬことがあります。そういう、副音声が音楽の上にかぶさってきたりする場合、それを気持ちよく聞かすためには、もとの音楽の音量を少しさげて小さくしないとけない、ということが起こったりします。つまり、音楽がうるさい、と感じなくなる程度の音量

像をことばに置き換える。ときには、ことば自体の面白さで笑っていただいてもよいのではないかと。

たとえば、ナイフ投げならぬ「するめ投げ」のシーンですね。美人のメス猫が付いているブラジャーのヒモが切られて(笑)、落ちるわけですけども、「おっぱいポロリ」とやりました。絵にはおっぱい描いてないんですけどね。猫なので(毛の下に隠れている?)。最初は「胸があらわになる」って、映像に忠実に試したのですが、よく分からぬから「おっぱいポロリ」が聞いた瞬間面白いじゃないかということ、だいたいそんな調子です。

「猫の国」に着いた時の風景とか、バロンとハルのダンスとか、雰囲気の良いシーンがあつて、いろいろな説明したくなるのですが、映画には緻密な音響効果という要素もありまして、風の音や、ワルツの音色を聞いて、自由に想像をめぐらしていただきたくて、そこは敢えて、解説は沈黙して、何も説明しないということもやっています。

にしないといけない。

こういうことが何度もあつて、その都度、いろいろ工夫しながら、自分でも勉強するつもりでやらせていただきました。この経験は、私自身にとってはひとつの成果にもなりましたので、今後同じようなことがあるときにうまく生かせるだろうと思っています。その意味でも、今回の仕事は、大変ありがたいチャンスでした。

09.03.14  
ビバシティ  
ホール

### 『猫の恩返し』

森田宏幸監督

本日上映した『猫の恩返し』は、2002年夏に全国で公開された作品です。この度は、目の見えない人や耳の聞こえない人に観ていただけるということで、もともとの監督である私自身の演出によって、字幕と

一方そうしたシーンの字幕では「猫じゃらしが風に吹かれる音」とか、「♪タンゴワルツ」とか、音についての情報を敢えて加えて、そのことで面白くなっているとあります。あと、あちこちで、やたらニャアニャア言ってますから。そういう漫画のような「擬音」ですね。「ヒュ〜」とか。実写にはあまりないですから楽しいです。

ももとの台詞には出てこなかった「猫いかだ」(終あおいさんの原作漫画にはあつた)という名前を入れたり、バンドネオンを弾いている年老いた猫が実はスティビー・ワンダーのように盲目なのですが(笑)、絵ではサングラスをかけている以外に分らないところを、「盲目の猫」とはつきり音声解説で紹介出来ました。ある意味、もとの映画より楽しみが増していると言えます。

集団で作る映画というものが、集まったスタッフのアイディアや、お客さんの声によって膨らんで育っていく。それは当たり前のことですから、またひとつ違った作品になったことは喜ばしいことでした。

音声解説が新たに付け加わったというわけなんです。

こうした場合、もとの映画を尊重すべきというのがまずありまして、あとから付け加えますから、もとの映画に忠実であるべきと考えるわけです。しかし、映像を言葉で説明するには限界がありまして、字幕も、俳優の表情や音楽の効果までは、とても説明仕切れません。

音声解説の原稿と声を担当した佐々木亜希子さんと、字幕を作った赤松立太さんには、その点の苦勞があつて、特に今回アニメーションの、しかもドタバタしてうるさい、テンポの速い映画なものですから、最初から最後まで、説明しなければならぬことが多いわけです。

そこで私自身としましては、そう細かく気を遣わずに、面白くすることだけを考えたという提案いたしました。特にアニメーションということで、こうして小さな子供さんにも楽しんでいただきたいですから、映像をことばで説明するというよりは、映



森田宏幸監督

今日見ていただいた皆さんも、この映画が「面白かった」「いや、つまらなかつた」と、どうぞ自由に声を上げていただきたいと思います。そのことによって刺激されて、また別のアニメーションがバリアフリー化される可能性がありますから。面白いアニメーション映画はたくさんありますので、どうぞよろしく願います。





3月14日 ビバシティホール 左から: 宍戸錠 稲森いずみ 林海象監督



3月15日 ビバシティホール 左から:リリー・フランキー 木村多江 橋口亮輔監督



## 作品解説

翔子は夫のカナオとともに、子供を身籠った幸せを噛みしめていた。しかし、そんなどこにでもいるふたりの突如として襲う悲劇——初めての子供の死をきっかけに、翔子は精神の均衡を少しずつ崩していく。うつになつていく翔子と、彼女を全身で受け止めようとするカナオ。困難に直面しながら、一つずつ一緒に乗り越えていくふたりの10年にわたる軌跡を、どこまでもやさしく、ときに笑いをまじえながら感動的に描きだす。人はひとりでは無力だ。しかし、誰かとつながることで希望を持てる。決して離れることのないふたりの絆を通じて、そんな希望のありかを浮き彫りにする。法廷画家のカナオが目にする90年代のさまざまな犯罪・事件を織り込みながら、苦しみを乗り越えて生きる人間の姿をあたたく照らしてしていく。

監督・橋口亮輔 出演・木村多江、リリー・フランキーほか  
ぐるりのこと、プロデューサーズ  
2008/2時間20分/35ミリ・カラー  
\*文化庁助成映画  
\*第32回山路ふみ子映画賞 第33回報知映画賞 最優秀監督賞  
\*現在、全国ロングラン上映中。



ぐるりのこと。

原作は、絵本作家である田島征三の自伝的エッセイ「絵の中のぼくの村」(くもん出版刊)。ふたこの兄・征彦もまた絵本作家。二人が(生涯で一番大切にしたい思い出と語る、高知での少年時代のエピソードに、原作にはなかった三人の老婆や伝説の妖怪を登場させ、物語をいっそうファンタジックなものにしている。1996年度第46回のヘルリン国際映画祭にて銀熊賞を受賞、日本映画としては9年ぶりの受賞となった。感受性豊かな少年期を独創的な視点で描き(静かなユーモアと深い叡智を湛えた作品として高く評価された。)

監督・東陽一 出演・松山慶吉、松山翔吾、原田美枝子、長塚京三  
シグロ/1996/1時間52分/35ミリ・カラー  
\*第46回ヘルリン国際映画祭、銀熊賞  
第23回ゲント・フランタリス国際映画祭、グランプリ  
第16回アミアン国際映画祭、グランプリ  
ほか受賞多数。



絵の中のぼくの村



THE CODE/暗号

創立60年の格式ある探偵事務所「探偵事務所5」。優秀かつ個性的な探偵たちが集まる中でも探偵507は暗号解読において天才的な才能を持っている。そんな彼が中国のある人物から依頼を受けたのは、これまで見たこともない配列パターンで構成された暗号だった。一瞬にしてその複雑な暗号に魅了された507はすぐさま上海へ。そこで彼を待ち受けていたのは、青龍率いる上海マフィア、追われ身の美しい歌姫・美蘭、敵か味方かわからない情報屋、そして謎の狙撃手。この危険な任務に没頭していく507は徐々に真相へと近づき、そこには哀しき真実が待ち受けていた…。

監督・林海象 出演・尾上菊之助、稲森いずみ、穴戸錠、松方弘樹  
THE CODEプロジェクト/2008/2時間4分/35ミリ・カラー  
\*第21回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門正式出品  
第8回光州国際映画祭オープニング招待作品  
\*2009年初夏、日活配給にて全国ロードショー。



花はどこへいった

フォト・ジャーナリストだった夫のグレッグ・デイビスを肝臓がんで亡くした坂田雅子監督は、喪失感とともに「なぜこんなにも突然に亡くしなければならなかったのか」という疑問を持つ。米軍兵士としてベトナム戦争に送られた過去をもつ夫・グレッグの死について、友人から当時浴びた枯葉剤が原因ではないかと示唆された彼女は、夫への追憶と枯葉剤への疑問からベトナムへ行くことを決意する。ベトナムでの枯葉剤被害の子どもたちやその家族との出会いから、これからは生き続ける力を与えられた坂田監督は、夫のグレッグが仕事を通じて伝えようとしていた、反戦や平和への意思にあらためて気づかされるのだった。

監督・坂田雅子  
ドキュメンタリー/シグロ/2007/1時間11分/DV  
\*アリス・ビジョン第17回地球環境映像祭「環境映像部門」入賞  
\*第26回国際環境映像祭、審査員特別賞  
\*2008年夏、若波ホールにて公開後、現在も全国公開中。

猫の恩返し



ごく普通の女子高校生・ハルは、ある日、トラックにひかれそうになった1匹の猫を助ける。実はその猫は「猫の国」の王子・ルーンだった。猫の国の王・猫王はハルに使者を送り、お礼として猫の国へ招待し王子の妃として迎えたいとハルに伝える。最近、憧れの男の子に付き合っている子がいることが分るなど、いいことがなかったハルはふと「猫の国もいいかも」と思い、誤解が生まれて結局猫の国へと連れて行かれてしまう。盛大な歓迎を受け、少し気持ちが揺れるハルと、そこへハルを助けに猫の男爵バロンが現れるのだった。

監督・森田宏幸 声の出演・池田千鶴、袴田吉彦、丹波哲郎ほか  
アニメーション映画  
スタジオジブリ/2002/1時間15分/35ミリ・カラー  
\*第7回アニメーション神戸 作品賞・劇場部門  
第6回文化庁メディア芸術祭、アニメーション部門 優秀賞  
第20回ゴールデングロス賞、日本映画部門 最優秀金賞

## 研究会に参加して

最初に活弁士の副音声による映画づくりと聞いた時には、いったいどんな事業になるのかと感じていました。その実態は、映画製作者や障害当事者、その他多くの関係者が、それぞれの思いや意見、知恵を出し合い映画鑑賞のバリアフリー化を目指した字幕や副音声製作を進めるという集まりでした。映画製作者が中心となり検討できたこと、集まった皆が誰もが楽しめる映画を作りたいという思いを持っていたことには、大きな意義があったと思います。この作品を障害のある人はもちろん、より多くの一般人、そして映画を製作する側の人にも鑑賞してもらおうことが大事だと考えます。今回の取組が、一般の人のバリアフリー映画への理解につながることで、製作者側の自主的な動きを巻き起こす契機となることを期待します。

(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部)

東秀明



## 取材者から見た バリアフリー映画作り

「すごく面白い映画を作っているよ」。バリアフリー映画研究会のメンバーの得意げな声に引きつけられ、映画の製作過程を取材することになった。何と言っても「活弁」がつくという。実はこれまで活弁映画を見たことはない。わくわくしながらライブで活弁を味わうと、NHKで流れる副音声は何と味気なく感じられることか。試写会の後の意見交換は目からうろこの落ちるような話ばかり。ろう者のメンバーから出された「文字文化で育ってきたので口語的なスラングは理解しにくい。『すこい』と『すげー』が同じ意味なのか迷うことも」という指摘にはっとさせられたことも。映画作りはまさに「バリアフリーとは何か」を問い続ける作業だった。

(NHK記者 太田敦子)



# 研究会委員のメッセージ

## (映画のバリアフリーについて)

### 今回の研究開発事業に参加して

●参加する経緯 プロロードバンドタワーとしては、シグロさんと組んで2005年から、バリアフリーに取り組んで参りました。この取組みは、シグロさんの映画に聴覚障害者対応の字幕をつけて、プロロードバンド環境で作品を観てもらおうという取組みでした。最初の作品としては、「花子」という作品で実施し、2006年のアメニティ・フォーラムのシンポジウムでも発表させていただきました。その時の反響に手こたえを感じて、少しずつではありますが、シグロ作品の聴覚障害者対応の字幕をつけた作品を製作してきました。2008年に公開しました「ドルフィンブルー フジ、もういちど宙へ」では、聴覚障害者対応だけでなく視覚障害者対応も製作しました。以前、視覚障害者の方に副音声について伺ったところ、面白くないという話をいただいていたので、シグロさんと相談して、活弁士を活用した新しい副音声を作ろうということになりました。そういう形でシグロさんと細々と続けてまいりましたが、今回多くの人が参加してもらったような研究成果を出せたのは非常に有意義だったと感じています。

●参加した感想 まず感じたことは、政府の研究事業に今までいくつか参加していますが、こんなに熱心な研究会は初めてでした。研究会が終わった後も多くの方が残り色々な話題で話しあい、そのまま遅くまで飲みに行つて議論をするということが頻繁にありました。こういう事は、今までの研究会では見られず新鮮さがありました。その理由は、多種多様な方がこの研究会に参加されていたからだと思います。私が今まで出ていた研究会では同業種が多く、新しい議論があまりおこらなかったのですが、今回の研究会

のメンバーが、障害者の方、大学の先生、機器を開発する企業の方、IT企業の方、映画プロデューサー、マスコミの方など多様な方が集まったため議論も多様な方面まで網羅でき非常に興味深いものになったのだと思っています。

●研究成果について 研究会を通して、字幕のつけ方、副音声のつけかたの難しさを痛感しました。障害時期が先天性なのか、先天性でなくても幼少のころなのかそれとも成人してからなのかと考えれば簡単にわかるようなことも理解しておらず万人に通じるものではないという当たり前のことを痛感しました。また、作品によって副音声にしてもなじみやすいものとなじみにくいものがあるということもわかりました。副音声のつけかたでも、監督主導で行った作品、活弁士が製作した作品、副音声台本をライターに書いてもらって作った作品など色々な形で挑戦できたことはとても有意義でした。そして、作品を5作品選ぶ段階で、私がプロデューサーしている「THE CODE / 暗号」が障害をお持ちの先生方の多くの方に5作品の中に入れていと言われたときは、理由がわからずただ作品性なのかと思ってしまうました。実際は公開前作品だからだという理由を伺ったときに機会均等ではないという新たな障害もあるのだということを理解できることになりました。これも私にとって大きな成果であり、今後の活動につなげていこうと思つています。最後に研究会の素晴らしいメンバーの皆様、このような機会を与えてくれた人たちに感謝します。ありがとうございます。

(THE CODE / 暗号)プロデューサー  
研究会副委員長

(株)プロロードバンドタワー 大和田廣樹



## この研究会と ペーパームント・ウェーブ

研究会のメンバーにならせていただきましたが、ほとんど出席できない、何のお役にも立てないメンバーですが、私には自分を考える良いチャンスを与えて頂きました。

それは映画を観る、見ることや楽しむことと私自身とを重ねて考えることになったからです。

今までは映画を観る時にタイトルや内容を見て選択をしていました。その時、自分の側はいつも通りの私ということが大前提でした。年を重ねたり、気が弱くなったり、病気になるったり、身体が不調であったり……。たった今の自分とは違う自分を想像しながら映画を鑑賞するということを考えることが出来たからです。

ペーパームント・ウェーブは平成17年から始めた障害者週間のリンクアップ事業ですが、中心課題は全ての人が支えたい、支えて欲しい状況になることを分かり合おうというものです。ペーパームント・ウェーブとこの研究会の方向が同じものを見ていると思わされています。

(ペーパームント・ウェーブ実行委員長  
岡山慶子)



## 方法としての映画

映画、この面白い、楽しい時間を掘り下げたところには、現代の社会で提供されているものでは得られない何かが見え隠れする。バリアフリーの映画をつくるということはこの「見えないものを見ること」への挑戦だと思う。

映画という問いの形は、外から与えられる物語なのだけでも、その時間で実感することは私たちの中で、元々存在したものと交流して新しい感覚になっていく。この研究会の参加者自体が人に伝えることの難しいものを見る存在にするという検証と発明のグループだったのだなと今は感じている。時間があれば手作りの製作作業にも加わりたかった。

(慶應義塾大学准教授  
日本精神科看護技術協会副会長  
末安民生)

末安民生



# 研究会委員のメッセージ

## (映画のバリアフリーについて)

### 無声映画やラジオ時代にバリアフリー 映画のアイデアがある

映画そのものをバリアフリーにすることは、映画館をバリアフリーにする(車イスでも快適に入場・鑑賞できるようにした映画館は増えている)ことよりはるかに複雑で、冒険的な試みである。今までバリアフリーの主役は「Act(行動)」の壁を崩すことだった。バリアフリー映画は「Sense(感覚)」の壁を崩すことを目指す。

今の映画は五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)のうちの視聴覚で楽しむ芸術だが、その出発は「Silent(無声)」だった。映画誕生から100年ちよつと経ち、その間に「Sound(発声)」を獲得した映画は、これから「Sense(感覚)」の壁に挑む。先端科学技術が解決するのだろうか。

個人的には「Silent Film(無声映画)」や「Radio Days(ラジオ時代)」に潜む、技術的限界の中で開発された表現の工夫に、バリアフリー映画のアイデアに近いものを感じている。

※今回上映されるバリアフリー映画には女性映画活弁士による副音声がついている。

映画プロデューサー・山上徹二郎さんが考えたこのアイデアは、まさに「Silent Film(無声映画)」からの発想ですね。

(映像プロデューサー/ディレクター 代島治彦)



### 映画にもバリアフリー？

いつも何気なく観ている映画も、「誰もがそのまま楽しめる映画ですか？」と質問されると戸惑いを感じるのには私だけではないだろう。今回の研究会では、あらためて情報伝達にも様々なニーズがあること、「すべての人がより良く理解できるように……」とすることの難しさに気づかされた。人がそれぞれのバックグラウンドによって理解が異なるのは当たり前としても、新たな視点で情報を補うことにより、新たな発見があり、楽しさが増すことは喜ばしいことだと感じた。映画を作る人たちの意向がどこまで鑑賞する側に伝わるかは製作者の腕にかかっていることだろうが、これだけのニーズに応えようとする製作者が出てきたことは嬉しい限りだ。

(元経団連障害者雇用アドバイザー)

西嶋美那子



## ● 感覚の宇宙を泳ぐ

映画を観ながら、自分は映画のどこを観ている(感じている)のだろうと思うようになった。『絵の中のほくの村』で活弁士の佐々木亜希子さんの声があると、曖昧あいまい模倣もまうとして自分を包んでいた映像や音声の霧がさつと晴れ、情報が一点に集約される感じがした。見える、聞こえる、ということ、無意識下で情報を選別している・していないこと、あれこれ楽しく考えることができた。言葉のない自閉症の息子は感情が揺らぎ変容していくのをとても敏感につかんでいると思う瞬間がある。その感覚、コミュニケーション！ バリアフリー映画はとても奥が深いと思う。

(毎日新聞夕刊編集部長 野沢和弘)



## ● すべての人にとって映画をもっと楽しいものに

映画鑑賞の喜びは、一緒に観ている誰かと、同じ場面で手に汗握り、泣き笑えるところにある。感動を共有できれば、映画は一人で観るよりずっと楽しい。だから、できるだけ多くの人たちと一緒に観たい。そのために、作品の一部として字幕と副音声欲しいのだ。

『DVDに字幕を義務付ける法律を作ってください』と訴える人たちをTVで見た。その思いに込めることができなほど、私たちの社会は情けなくはないはずだ。近い将来には、万人がより楽しめるよう、あらかじめ字幕・副音声が入った映画が当たり前になっている。そう、確信している。

(社団法人日本広報協会編集部 堀田賢豪)



# 研究会委員のメッセージ

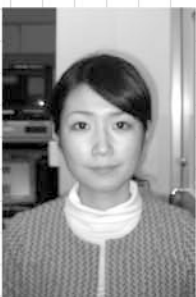
## (映画のバリアフリーについて)

### 『猫の恩返し』の製作過程を取材して

『猫の恩返し』(スタジオジブリ・森田宏幸監督)のバリアフリー映画製作過程を取材した。実感したのは、製作過程に監督が参加することで、副音声・字幕の質が変わるということ。ストーリーを正確に把握できるだけでなく、作品の世界観までもが味わえるようになるのだ。監督自身も、研究会のメンバーでもある障害当事者との議論に大いに刺激を受けたようで、スケジュールを調整しては製作作業に加わり、収録作業は深夜にまで及んだ。

「作品を一人でも多くの方に観てもらえること以上に、嬉しいことはない」と語る監督の思いは、映像の仕事に携わる端くれとして、よく分かる。バリアフリー映画がスタンダードになることは、鑑賞者だけでなく、製作者にとっても、幸せな状況なんだと思う。

(NHK大津放送局 村瀬慶子)



### 『みんなちがってみんないい』けれど

手話通訳を生業にしている。手話でニュースを伝える仕事をさせてもらっている。人をつなぐこと・人とつながること・人に伝えること・人を受け止めること……その意味や無意味や楽しさや辛さや真つ向から受け止める。それが、私の仕事であり人生だ。しみじみ思う。メッセージというのは、基本的に、伝わらないものなのだ。そして……伝わらないからこそ伝えようともがく、伝わり得ると信じてあがいてみる。それが、人なのだ……と。この研究会でお会いする方たちからは、なんとなく、自分と同じ匂いがする……ような気がする。もがき方やあがき方は違っただけけれど、メッセージの力を信じようとしている人……の匂い、なのかもしれない。

(世田谷福祉専門学校手話通訳学科科長

NHK手話ニュースキャスター

飯泉菜穂子)



# 製作日誌

北園賢剛(研究会副委員長) 長沢義文(シゴロ)  
水流源彦(研究会事務局) 片桐公彦(研究会事務局)

2008年 8月6日(水) 絵の中のほこの村 副音声・打ち合わせ 10:00~@シゴロ

参加者 東陽一監督、佐々木亜希子、山上徹二郎、山添時彦  
・台本は東監督自身が作成、東監督に事前に読んでいた台本に対する考えや提案を佐々木さんが伝える。それを踏まえ、スタッフが収録までに台本を固めていく。

8月30日(土) 絵の中のほこの村 副音声・スタッフ収録 10:00~@協映スタッフ

参加者 東陽一監督、佐々木亜希子、山上徹二郎、山添時彦  
・演出も東監督が担当。これで、副音声は完成。

11月19日(水) 花はどいへいっつた。 副音声・吹替え収録 9:30~@シゴロ

参加者 山本草介  
・英語、ベトナム語のインタビューもすべて副音声ナレーションになると、出演者も多く、話者が誰か混乱が生じるので、今回はワイヤースーパー(吹替え)で対応することに。計5人の声優さんが担当。

11月25日(火) 花はどいへいっつた。 副音声・スタッフ収録 10:00~@協映スタッフ

参加者 佐々木亜希子、山添時彦、山本草介  
・坂田雅子監督に台本を確認していただき、手直しして台本を作成。  
・台詞と台詞の間隔が劇映画に比べ短い。その隙間にうまこナレーションが収まるように注意しながら録音を進めていき、副音声の完成。

12月2日(火) 花はどいへいっつた。 副音声・打ち合わせ 10:00~@シゴロ

参加者 佐々木亜希子、水口真、山添時彦  
・水口さんが台本を作成、収録本まで時間が限られているので、確認しながらの読み合わせ。リハーサルに近い形。

12月5日(金) 花はどいへいっつた。 副音声・打ち合わせ 10:30~@シゴロ

参加者 佐々木亜希子、水口真、山添時彦  
・前回の打ち合わせの続きから。最後まで読み合わせし、明日の収録に臨む。



12月6日(土) 花はどいへいっつた。 副音声・スタッフ収録 1日 10:00~@協映スタッフ

参加者 佐々木亜希子、堀田賢豪、水口真、山上徹二郎、山添時彦  
・製作スタッフ、録音の小川武さんにも収録に参加していただき、撮影現場の夜更からのアドバイスを受けながら進められた。スタッフのなかで一番長い作業。当初一日の予定だったが二日に分けられた。

12月7日(日) 花はどいへいっつた。 副音声・スタッフ収録 2日 17:00~@協映スタッフ

参加者 佐々木亜希子、水口真、山上徹二郎、山添時彦  
・収録2日目。この日も録音の小川武さんに参加していただき、副音声の完成。

2009年 1月15日(木) 猫の恩返し。 副音声・打ち合わせ 16:00~@シゴロ

参加者 佐々木亜希子、水口真、村瀬慶子、山添時彦  
・事前に台本メールで送付済み、佐々木さんが台本を作成、本編冒頭から読み合わせを始め、演出の水口さんと意見交換。初めてのアニメーションという点もあり、細かい描写についても意見を出し合う。  
・この日は、本編30分までで終了し、次回に持ち込みたい。また、打ち合わせ風景の撮影と佐々木さんへのインタビュー取材。

1月22日(木) 猫の恩返し。 副音声・打ち合わせ 10:00~@シゴロ

参加者 佐々木亜希子、水口真、村瀬慶子、山上徹二郎、山添時彦  
・初めに、山上さんがアニメーションに副音声をつけていく上でこの考えを話す。現行の台本より、もっと情報が増える方向に。前回同様、通して読み合わせしていく。  
・修正も反映させた。本編も森田監督との打ち合わせまでに、送付第一稿とする。  
・今回も、打ち合わせ風景と佐々木さん、水口さんへのインタビュー取材。

1月28日(水) 猫の恩返し。 副音声/字幕・打ち合わせ 13:00~@シゴロ

参加者 森田宏幸監督、野中晋輔プロデューサー、赤松立太、天野克彦、大河内直之、佐々木亜希子、水流源彦、水口真、村瀬慶子、山上徹二郎、山添時彦  
・森田監督とスタッフから野中プロデューサーをお呼びしての打ち合わせ。まずは、副音声から。先にお送りしていた第一稿に、森田監督の手を加えたものを、冒頭5分程度画面を見ながら読み合わせ。それ以降も同じように進めていくことにし、すべてはメールでのやり取り。また、佐々木さんの活弁の技術をもっと生かしていく事を確認。大河内さんからは、副音声がなくてもいいが、アニメーションで以前に見ていたように、何の音も分からなかった箇所や、説明されたものの情報など、副音声がなかったからこぼれた情報などの発音がなかった。赤松さんが合流後、森田監督と字幕の打ち合わせ。文字の位置や擬態語について、打ち合わせ風景の撮影とインタビュー取材が入る。





# 聴覚障害者用 字幕スーパードについて

赤松立太(パツンパツン)

トッキー映画の

成立以来、映画に  
とって音声は不可欠  
の要素となり、そして台  
詞を持った外国映画に対し  
て字幕が用いられることとなつた。一  
方、音声の情報を持たないことを前提とす  
るバリアフリー対応字幕の場合、映像翻訳では非母語  
に向き合う字幕が、母語に対して用いられることにな  
る。

外画字幕にある台詞の表現に加え、音声要素で重要  
な情報を文字で伝えることが必要となる。そうした音  
声要素には、台詞、効果音、音楽がある。また、画面に登  
場しないなど、話者が判定しにくいような台詞の話者  
名も表記も欠かせない。

一般に字幕製作は、すでに映像の中で発話されてい  
る言葉を文字として画面に表示するわけだが、すべて  
の台詞が文字化できるわけではない。映像、カット割  
りなどを考えながら、どの話者の台詞を、どう区切つ  
て表示するかで、読みやすさや臨場感に大きな違いが  
生まれる。さらに映像表現である以上、文字数は表示  
時間に拘束される。映像内の要素と字幕の関係なども  
考慮の対象になる。そういう要素を上手にまとまれ  
ば、映像に合わせたリズムのある表現が字幕にも生ま  
れてくる。

なものとならざるを得ず、字幕で表現するかどうか  
は、その都度、判断が必要となる。

また、映画には、映像や台詞と共に音の面でも、いろ  
いろ仕掛けがあって、その妙が楽しみどころになって  
いる。例えば「猫の恩返し」の中で目覚まし時計が登場  
するシーンが3カ所あるが、1つだけ音が違う。それ  
には理由が存在するのだが、これを伝えるためには擬  
音の使用が不可欠だった。このような細かい演出は、  
聴者が観る場合でも気がつく人もいれば気がつかない  
人もいる。映画には、こうした無数の小さなパスル  
が存在しているわけで、そうした音は可能ならば入れ  
ておきたいと思う。優れた作品は、そうして細部の見  
えないあやが微妙に織りなされていて、見直すたびに  
新しい発見を与えてくれるものだ。

音楽的な演出についても同じことが言えて、映像や  
言葉に対する音楽の役割も、作品によって、比重は大  
きく異なる。音楽があるからそれを字幕で表記するこ  
うのではなく、演出上の重要度によって表記の必要  
性を適宜検討するしかない。

また、効果音、音楽ともに、一つ一つのシーンにおい  
て字幕表示の是非だけでなく、作品全体の中の通時  
的なバランスという面で考慮することが必要である。

各作品について

「ヴェロニカ」

大勢の話者が同時多発的に早いテンポでしゃべる  
シーンでは、話者と台詞の選定に注意した。音楽、効果  
音の表記は、伝統的な障害者対応字幕のスタイルを使  
い、とくに効果音に注意した。実は作品中の音楽、環境

映画字幕の役割には情報の伝達と映像芸術表現の伝  
達との二つの側面があり、ニュース報道のように情報  
伝達が主たる場合と、作品性の高い映像表現の場合  
は、当然ながら異なる方法論が必要となる。研究会の  
議論は非常に啓発的だったが、とくに聴覚障害者の多  
様性、そして作品の性格の多様性の間で、字幕がより  
よい橋渡し役ができ、映画という楽しみを広げること  
ができればよいと思う。

方法的なまとめ

今回の5作品のバリアフリー字幕製作を通しての  
作業について、とくに技術的な面から簡単な報告を記  
し、今後の製作への参考としておく。

台詞について

オリジナルの台詞については、原文を生かし、外画  
字幕のような文字数を切り詰めるテキスト編集は最  
小限にとどめた。必然的に字幕中の文字数は、外画字  
幕に比べて2〜3割程度、多くなっている。

放送やビデオでの外画字幕の伝統的なルールでは、  
1枚当たりの字幕について、横書きの場合、1行13字、  
2行を最大の数値とし、表示時間は8秒をもつて最長  
とする。長い台詞では、4秒程度の表示時間が最も読  
みやすい時間となることを心がける。1秒あたりの読  
みやすい文字は3字から4字とされている。ただ、こ  
の数値は表示秒数、シークエンス中の会話の量、漢字  
と仮名の比率など、様々な要素によって変化する。こ  
のようなルールは、文字の読みやすさと臨場感を高め

音、効果音は、非常に抑制されて使われており、その効  
果が際立っている。音楽の表記をしていない部分は、  
ほぼ音楽が存在しない。一方で、ラスト近くなど複数  
のシーンにまたがって8分にわたる長時間、連続して  
使われている音楽は、続くことを最終段階の編集で付  
け加えた。季節感を示す音や、効果音や環境音が明確  
な意図を含んで前後の場面と強いコントラストをもつ  
て使用されているようなシーンでも、字幕化してい  
る。

「花はどこへ行った」

ドキュメンタリー作品であり、日本語字幕のついた  
英語とベトナム語のインタビューと日本語ナレーショ  
ンで構成されている。ナレーション部分のみ字幕を追  
加した。サンプル版でのオリジナルの字幕とナレー  
ション部分の区別がつきにくいという指摘を受け、字  
幕のエッジを青で表示した。ナレーションという特性  
もあり、画面構成上の違和感は、ほとんど感じられな  
かった。また、音楽や効果音についての表記が、研究会  
でも議論になったが、映画の中身に関わり強い「ギ  
ターの音楽」などの字幕化はあってよかったと思う。

「絵の中のほくの村」

東監督自身が字幕原稿をまとめた。音楽、効果音な  
ども監督の指示に従い、こくわずかにアレンジをし  
た。作品の一つの特徴として方言の多用が作品の味わ  
いとなっている。方言ゆえの読みにくさや文字量が増  
えてしまうということがあるが、聴者の場合も聴きづ  
らいのにあえて方言を使っている意味がある。スケ

る目的がある。

今後の課題として、視聴対象を広げ、外画字幕の標  
準程度まで文字数を削減していくほうがよいかどう  
かという問題がある。ターゲットが広がれば、読みや  
すいように文字数を減らしてリライトする方がよい。  
これには、それなりの作業的なスキルと手間が必要と  
なり、また日本語のオリジナルの内容を改編することに  
は是非も問題になる。

また、あまりに多くの文字が画面を占有することを  
避け、長い文章は、複数の字幕に分けて表示している  
が、一つの文が複数の字幕に分かれる場合、後の字幕  
に文章が続くことを長い横線で示したり、文章が切れ  
ていることを「...」や「？」などの記号で示すのが  
映画字幕の基本だが、これをより積極的に用いて文章  
の流れを示し、字幕の切れ目や改行の位置などにも注  
意して文字の視認性を高めることが求められる。

音楽と効果音

映画作品の音楽や効果音は、作品によって扱い方が  
大きく違う。《銃声》(次のカット)振り返る主人公  
などのように演出上、一つの音が次の場面の展開への  
きっかけになっている場合が、最も積極的な使用方法で  
あり、その欠落は演出を直接的に損なう。また季節を  
暗示するような環境音は、より間接的だが重要な表現  
要素となる。その他にも無数の効果音が作品中に存在  
している。

作品のために必要な音声情報が、視覚的な情報なし  
に用いられているときは、字幕で示すことが望まし  
い。しかし、この必要性の有無の判断は、多分に主観的  
なものである。

ジュールの都合で研究会の議論の対象に入れられな  
かったが、音楽に対する表記については、今回の作品  
中でも最も良い例になる。この作品は、登場人物や情  
景に対し、意識的に音楽が割り当てられ、現実世界に  
挿入された非日常的なシーンが暗示され、場面転換の  
導入の役を果たしている。

「猫の恩返し」

アニメーションは、映像撮影のような環境音がない  
ため、作品中の音がすべて演出的な意図を持って作ら  
れている。台本中の効果音についての細かい指示が面  
白く、記述的な字幕よりも擬態語や擬音を採用した。  
擬音には台本の表現を優先したが、猫の鳴き声など音  
声収録時の声優のアドリブなどもあり、最終的には森  
田監督が確認した。

演出的な効果音、例えば、破裂音とかトラックの爆  
音などを多めに入れたサンプルを作成したが、研究会  
での議論を受け、視覚的に十分な表現がされている  
シーンでの字幕を大幅に削除した。猫の行列シーンで  
の楽師たちの音楽、舞踏シーンの音楽などには字幕を  
入れたが、物語自体に含まれていない音楽については  
割愛した。一方、行列のときの音楽が長く継続するシー  
ンでは、継続を示す表現を追加した。

また、話者が分かりにくいという指摘があった。登  
場人物の口の動きに注意して、役名を振っていたの  
で、これは意外だった。デザイン上、人物の口のサイズ  
が小さいことも一因かもしれない。また、実写に比べ  
て、声優の演技によるキャラクターの性格づけが強い  
ので、聴者は話者を判定するときに、声色で判断する

ウェイトが高いことが予想される。

対応策として、登場人物による字幕の色分けという提案もあったが、画面のデザイン構成から色のある字幕は避けたいと考え、字幕表示の水平位置を人物に近づけることにした。結果的には眼球の移動も抑えられ、話者名の表示数も減らすことで見やすさと、臨場感を高めたのではないかと。

#### 「THE CODE / 暗号」

一見型にはまったようなストーリーやわざとらしい台詞と、洗練された映像の対象が生む独特の現実感が基調にある。意識的に劇画的な表現が意識して使われている。それを受け、効果音については、視覚情報で示されていても、演出の展開上、意図的に強調しているものに字幕をつけている。「銃声」という表記ではなく林監督の指示で「スキューン」という擬音を入れていくのも、同じ考え方に立っている。

一般に映像作品中の銃声は、実際の音とは異なる人工的な音を用いられているし、擬音や擬態語の文字による表記は、必ずしも現実の音を文字で表してはいないし、多くの慣習的な表現が多い。漫画や劇画はこうしたメタフォアを多く生んでいる。また、この作品は、音楽に音楽的な質も高い作品だが、劇中歌以外の音楽については字幕による提示が不可避とはいいがたく、表示は行っていない。



## 副音声活弁について

活動弁士 佐々木亜希子

「これまでの殺伐とした副音声ではなく、健常者もともに楽しめるような活弁を

活かした副音声ができないか」とお話をいただいたのが、二年半ほど前のこと。今年度は、バリアフリー映画鑑賞研究会で製作された字幕と副音声「ぐるりのこと。」「花はどこへいった」「絵の中のほくの村」「猫の恩返し」「THE CODE / 暗号」の5作品で、副音声ナレーションを担当させていただきました。

副音声活弁の目指すところは、視覚障害者と健常者が様々な映画作品を一緒に楽しめるような作品ナビゲーションです。ただ、まだまだ副音声のつけ方は試行錯誤なので、今回の5作品はそれぞれの文体もトーンも違います。副音声台本を誰が主体となって書くかでもずいぶん違います。少しでも、目の見えない方に豊かな作品の世界を味わってもらうために、入れる情報や文体、語り口調も皆で模索して作っているわけですが、今回は、製作側である監督と、視覚障害者で情報研究のエキスパートの方々にかかわっていただいたことで映画表現の幅と可能性が広がった気がします。

『絵の中のほくの村』の東陽一監督、スタジオジブリ作品『猫の恩返し』の森田宏幸監督、今年公開の新作『THE CODE / 暗号』の林海象監督、監督の「こ

うやって見せたい」という意図のシーンなんだという意向が入ることで、副音声は副音声以上の意味と価値を得て、新たな作品に生まれ変わっている感があります。

スタジオジブリのアニメ作品も今回が初挑戦、第一稿、もっと主人公の主観などが入った第二稿と私も台本作りに苦心しましたが、森田監督が大幅に加筆してくださった第三稿は、監督でなければ入れられないシーンの解説や選択がたくさん入り、オリジナル作品のような面白さになりました。収録まで立ち会っていただき、声のトーンの演出までしていただき、やり取りをしながらの製作過程がとても楽しかったです。

林海象監督の『THE CODE / 暗号』の副音声台本は玉井夕海さんが書き、皆で少しずつ手を入れるという形で収録。アクション小説を聞くようなスピード感と、詩的情感あふれるものになりました。

作品のテイストがそれぞれ違うように、副音声のスタイルも様々で当然。すべての映画が最初からバリアフリーを想定して作られたら、副音声ナレーションももっとバラエティに富んでくるはずですが。

公開と同時に一度は映画館でバリアフリー上映が行われ、DVD化する際にもその素材を使う。健常者には、製作側の意図も含めた2度おいしい映画の楽しみ方が提供できることになりました。子どもたちや知的障害を持つ人たちも、活弁的な副音声ナレーションがあることでよりわかりやすく楽しめるのではと思います。

視覚障害を持つ方もそうでない方も、副音声によって、映画作品をより理解し、感動し、味わえるように。



世界が開かれていくといいなと思います。いい映画を、語りを媒体にして届けることができたら私自身も非常に幸せです。

12:57:00

副音声

523、雄叫びを上げ飛び込む。迎え撃つ手下の銃弾を探偵十手で跳ね返し電気ショックを与え次なる敵に突撃。羽交い締めにするも抵抗され銃弾を発射する胸元の敵、507その隙を狙って脱出成功。しかし523の腕をはね除け形勢逆転の敵、床に転がった523に銃を向ける。探偵、絶体絶命

523

「まーきちゃん!!」

13:16:00

副音声

誰か! 助けて! と、そこへ現れたるは白服のガンマン。

あっ! その JOE THE ACE のバックルは! ?

523

「会長!!」

13:33:00

副音声

誰もいなくなった洞窟。鉄扉を前に一人立つ美蘭が、刻まれた暗号盤に右手の平をそっと押し当てなげている。

13:42:00

そのすぐ横の取手を見やり、緩む唇。

13:46:00

手を伸ばしかけたその時……

声

「その扉は開だ。開けないほうがいい」

13:52:10

副音声

美蘭、鈍い眼差して振り返る。

美蘭

つば広の帽子をかぶったロングコートの男が歩いて来る。

椎名

「あなたは？」

「大きくなったな。美蘭」

14:14:10

副音声

怪訝な面持ちの美蘭。男の顔をじっと見る。焼けて光る肌、白く豊かな髭をたくわえた口元、(つぶらな瞳)

美蘭

「…父…さん……？」

椎名

「お前を迎えに戻った時、蘭の花は枯れてしまっていた」

14:42:20

副音声

美蘭、言葉が出て来ない。

美蘭

「あれからずっと一人で生きてきたわ」

椎名

「私もそうだ」

15:03:00

副音声

美蘭の目から涙が零れ落ちる。

美蘭

「なぜ、なぜ私を捨てたの？」

椎名

「捨てたのではない、おまえを守るにはああするしかなかった」

美蘭

「私を守る? こんな疫病神まで私に背負わせて」

椎名

「私の任務をまっとうするためだ」

15:36:10

副音声

瞬き一つなく告げる椎名に、美蘭、握りしめていた銃の狙いを定める。

美蘭

「任務? 何の任務なの? 戦争はとっくに終わってるのよ」

椎名

「私の中での戦争はまだ終わっていない」

16:04:10

副音声

美蘭は崩れ落ちそうになりながら銃を構え直す。

美蘭

「あなた狂ってるわ」

03:58:00

副音声

始める。楽しそうな二人。割れた板壁から日の光が差し込み、川辺からやってくる暖かな風の吹く小屋の中で、笑い合いながら、二人はくるくと、いつまでも、踊り続ける。

04:06:10

美蘭

美蘭、繋いだ手で507の体を引き寄せ、彼の左肩に小さな顎を乗せる。

04:29:20

副音声

507、静かに踊るのを、やめる。「抱いて……私を抱いて……」

美蘭

507、握っていた左手を固く握り返し、美蘭の体を引き寄せる。美蘭はその手をほだき、細い両手の指を507の肩に這わせるようにして、首筋に頬を寄せる。

05:07:20

副音声

「本当に私を抱いて……あなたに抱かれないと私、あなたの愛情を感じられないわ」

05:41:00

副音声

507の肩を抱く美蘭。507、それにも増して強く美蘭の体を抱き締める。安心したように顔を埋める美蘭。

05:47:00

微笑みを浮かべながら、507の額に、自分の額を寄せ、ゆっくりと、唇を重ねてゆく。

05:57:20

美蘭の唇が離れるのを感じ、目蓋を開く507。

06:00:20

美蘭、乱れた前髪の隙間から507をじっと見つめ、その腕でもう一度強く彼の体を抱き締める。

05:11:00

柔らかな風に吹かれる二人。

06:18:00

507の指が美蘭のドレスの開いたところに入り、背中の刺青に触れる。その瞬間、指が何かを感じ動きが止まる。滑らかな背をなぞる507の指。

06:21:10

507の中に閃きが生まれる。

06:24:20

刺青に隠された最後の秘密。

06:26:10

それは……

06:27:10

情報屋(中)

「……抱いてやれよ。」

06:29:20

副音声

立っていたのは情報屋

06:35:00

情報屋(中)

「その女は背中の暗号がなかったら、男に抱かれるくらいしか能のない女だ」

06:38:10

副音声

小龍も現れる。

06:41:10

507

「どういことだ?!」

06:43:10

情報屋(中)

「言ったら、ここでは誰も信じるなって」

507(中)

「僕たちを売ったのか？」

情報屋(中)

「ああ売った。」

## 『猫の恩返し』 副音声用台本より抜粋

703	01:44:04:23	01:44:07:24	00:00:03:01	私が ハルさまを喜ばせて ごらんにいれます
704	01:44:08:17	01:44:09:17	00:00:01:00	フーム
705	01:44:09:25	01:44:11:02	00:00:01:07	どうされます？
706	01:44:11:10	01:44:13:19	00:00:02:09	まっ いいんじゃにゃい
707	01:44:16:20	01:44:17:12	00:00:00:22	…ん…
708	01:44:18:27	01:44:21:18	00:00:02:21	お嬢さん わたくしと一曲
709	01:44:22:12	01:44:25:01	00:00:02:19	私 ダンスなんて 踊れニャいって
710	01:44:25:04	01:44:28:02	00:00:02:28	もう 猫語になってるしー
711	01:44:30:11	01:44:31:14	00:00:01:03	おまかせを
52	01:44:41:13	01:44:49:29	00:00:08:16	(♪バンドネオンの音 タラララララー)
53	01:44:50:19	01:44:58:14	00:00:07:25	(♪タンゴのダンス・ソング)
714	01:45:16:17	01:45:18:11	00:00:01:24	なかなか いい感じですか
715	01:45:18:14	01:45:19:05	00:00:00:21	フン
716	01:45:31:15	01:45:36:18	00:00:05:03	なんだろう これ？ こんな気分 はじめて…
717	01:45:37:10	01:45:40:12	00:00:03:02	このまま猫になっても いいかもお (ヒューン)
54	01:45:40:01	01:45:41:11	00:00:01:10	ヒエッ
718	01:45:41:13	01:45:42:05	00:00:00:22	だめだ ハル！
719	01:45:42:24	01:45:45:20	00:00:02:26	自分を見失うんじゃない
720	01:45:46:04	01:45:46:27	00:00:00:23	えっ
721	01:45:47:17	01:45:49:22	00:00:02:05	キミは キミの時間を 生きるんだ (ストロー： ズズズズー)
723	01:45:53:25	01:45:54:18	00:00:00:23	うーっ
724	01:45:56:29	01:45:58:22	00:00:01:23	前にも 言っただろう
725	01:46:00:21	01:46:01:22	00:00:01:01	あなたは…
726	01:46:05:27	01:46:08:13	00:00:02:16	その音楽 止めー！
727	01:46:17:14	01:46:20:06	00:00:02:22	コソコソと怪しいヤツ
728	01:46:20:09	01:46:22:15	00:00:02:06	きさま いったい何者じゃ！
729	01:46:24:01	01:46:26:12	00:00:02:11	名乗り遅れて失礼した

## 『絵の中のぼくの村』 副音声用台本より抜粋

646	A	02:31:55:19	02:31:59:22	それ以来 センジは 学校に来なくなった	
647	A	02:31:59:24	02:32:05:10	どこで何をしているのか 誰に聞いても分からなかった	
105	B	02:32:08:27	02:32:12:02	♪軽快な音楽	縦書き
648	A	02:32:43:20	02:32:45:09	ナンテンの実は？	
649	A	02:32:56:06	02:32:58:16	中の方にヒサカキおいて	
650	A	02:33:02:09	02:33:04:26	昨日しかけたワナ 見にいこ	
651	A	02:33:12:18	02:33:13:28	どこやったろう	
652	A	02:33:15:10	02:33:16:09	あそこや！	
653	A	02:33:21:00	02:33:23:13	誰でえ！ 誰がこんなこと！	
654	A	02:33:23:16	02:33:25:07	しょう へごな！	
106	B	02:33:25:08	02:33:27:06	バサバサッと鳥の羽音	縦書き
655	A	02:33:32:14	02:33:35:00	こいつが 自分で逃げたがじゃ	
656	A	02:33:35:02	02:33:36:28	荒らされたがやと違うぜ	
657	A	02:33:41:00	02:33:42:08	コジュケイや！	
107	B	02:33:53:13	02:33:55:28	鳴き声をあげて羽ばたく	縦書き
108	B	02:34:29:24	02:34:32:04	♪不気味な音楽	縦書き
109	B	02:34:33:29	02:34:36:09	老婆たちの高笑い	縦書き
109.01	B	02:34:39:00	02:34:40:26	コジュケイの鳴き声	縦書き
110	B	02:35:02:03	02:35:03:23	♪音楽 終わる	縦書き
658	A	02:35:09:03	02:35:11:28	セイちゃん 道を間違えたが じゃないかよ	
659	A	02:35:12:01	02:35:13:26	どこやろ こは	
660	A	02:35:14:17	02:35:15:19	ここ 降りろ	
661	A	02:35:19:14	02:35:21:06	うわっ！	
662	A	02:35:22:18	02:35:23:17	ああっ！	
663	A	02:35:29:23	02:35:32:13	(男性) おい コシキを上げてくれるか (セイゾウ) コウゾを蒸しゆう	
664	A	02:35:34:21	02:35:37:03	(男性) ハツミ！	
665	A	02:36:05:16	02:36:06:29	八木やないか	
666	A	02:36:13:25	02:36:15:06	八木ハツミや！	
667	A	02:36:15:11	02:36:16:20	♪ハツミのテーマ曲	縦書き
111	B	02:36:19:18	02:36:22:15	食べや ふかしたてじゃき	
668	A	02:36:45:02	02:36:47:25	おいしいで	
669	A	02:36:54:03	02:36:55:06	ありがとう	
670	A	02:36:55:22	02:36:57:08	ここ ハツミのうち？	
671	A	02:36:57:11	02:36:58:11	うん	
672	A	02:36:58:29	02:37:00:20	(男性) ハツミ 何しゆう！	
673	A	02:37:01:08	02:37:02:28	ほんなら またね	



上映会場：彦根 ビバシティホール

アンケートの集計

性別	年齢
■男：57	■19歳以下：13
■女：122	■20歳～29歳：18
■不明：1	■30歳～39歳：26
	■40歳～49歳：22
	■50歳～59歳：36
	■60歳～69歳：45
	■70歳～79歳：14
	■80歳以上：2

障害の有無	回数	回数	回数	回数	回数
■視覚	45	■聴覚	7	■知的	1
■なし	106	■肢体	5	■内部	不明
		■記載なし	7	■不明	9

アンケートに寄せられた声

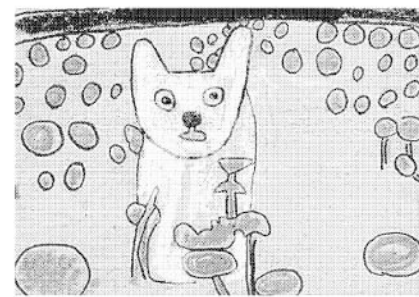
- 視覚障害のある人たちの声
- 説明と映画の台詞が区別されて、聞き取りやすく、場面説明が瞬時に理解できた。
  - 状況を思い浮かべやすかった。
  - 音や台詞がまじってかえって聞こえにくかった。
  - 効果音等の音との重なりが気になった。
  - 副音声で早く聞き取りにくい。
  - 説明文が多いので、理解すると、その場の状況が終わっている。
  - 画面を言葉に置き換える副音声の作り方に感動です。
  - 製作者と鑑賞者とも慣れることが必要だと思った。
  - 普通の映画館で視覚障害の人が一緒に楽しめる副音声用の機械があるといいなあと思いました。

- 聴覚障害のある人たちの声
- 画面の下部でなくても、画面の横(両端)にあってもいいかなと思った。
  - 補聴器を装着している聴覚障害の私にとってはとても気になった。
  - 副音声と映画の台詞がかぶっていて、余計にわからなかったところがありました。
  - 字幕がない副音声は聴覚障害者にとって「何を言っているんだろう...」って気になり、辛くも感じました。
  - 内容は聞き取れないから分からないけど、「音」として気になった。
  - 色々な障害者が観る映画を統一させるのはとても難しいことだと感じました。

一般の人たちの声

- 音楽の解説が特に細やかに感じました。
- 聞き取りにくい声も字幕でよく分かった。
- 分かりやすく、上手く表現されていた。
- 老いてきて見えにくい所もあり、声と字でよく理解できるのでよかったです。
- 字が大きく、文章も短くまとめていた。
- 女性のナレーション(副音声)の字幕がなかった。
- 分かりにくいことでも、それを分かりやすく説明してくれたので、分かりやすかったです。
- 感情が短く的確な表現で、状況説明が丁寧に上手く表されていたと思う。
- 目を閉じると情景が浮かんできました。
- 慣れていないため、スピードが速く感じました。
- 説明のすぎで、つい頼り切った観てしまっているというか、映画の中を観察しなくなっていく...
- 画面より先に進むので、次のシーンが分かっちゃった。
- 副音声の主観が入っている。少しじゃまだった。
- 目で見たことを説明されると分かりやすいが、思考力が落ちる気がする。
- 普段から映画館でイヤホン(説明器)で観られるようになったらいいのと思った。
- きつと音の調節、音量にも気を遣って映画製作しているのだなあと思いました。
- 目と耳をフルに動かさなくてはならず、難しかった。
- 障害者の人にとっては忙しいなと思いました。
- 健常者にとっても分かりやすかったけど、障害者にとっては大変だと思った。
- 副音声の説明と自分で感じるものが違うので、面白かったです。
- 健常者にも良かったが、より芸術を求めている人には「ない方がよい」と思われるかな。
- 副音声も邪魔になるかと思っただけ、そうでもなかった。
- どの映画もすばらしかったので、多くの方に観て欲しいと思います。
- バリアフリー映画が世の中にもっと出ると良いと思います。
- 既に上映された映画に字幕、副音声をつけるのではなくて、バリアフリーを前提に映画を作られて、みんなで楽しめる映画にもっと欲しい。
- このような映画がいつでも身近に観られる様になればいい。誰にも優しい分かりやすい映画だと思っています。
- 副音声の入れ方とか字幕の入れ方とか、工夫すべき所は多いと思います。もちろんプラスの意味での工夫をお願いします。
- 製作、原作、監督の方が副音声、字幕に関わられた由、感激しました。
- 年を重ねれば全ての人が大なり小なり、目が見えにくくなったり、耳が聞こえなくなったりする。全ての人が映画を楽しめるようにこの取り組みはすばらしいと思います。

### ネコのあくび



絵・伊賀高史

映画を見ているあなた、映画のどこを見えていますか？字幕を追っているスクリーンの動きがぼやけ、セリフに気がとられると背景の音が拾えない。案外、ポーツと映像や音声の渦に身をゆだねているのかも？

### 見えない人の映画

「たのは、絵の中のほくの村」(東陽一監督)を活弁士付きで見ると、目の見えない人や耳の聞こえない人が楽しめる映画を作ろうという、障害のある研究者、福祉の支援者、映画プロデューサーなどによる研究チームの実験である。

さあ上映時間。スクリーンが動き出し、その横で活弁士の佐々木亜希子さんが風景や人物の動きを説明する。活弁士といっても声を張り上げるわけではなく、少し抑えたトーンだ。すると、曖昧模範として自分を包んでいた映像や音声の霧が晴れ、自分の意識が一点に収められていくのを感じた。眠っていた感覚がさわつくようだ。森羅万象から人間が意識的に取り入れている情報は意外に少ないのかもしれない。

2月に大津市で開催された「びわこアムニティ・バリアフリー映画祭2009」では、同作に加えて「ぐるりのこと」「花はどこへいった」「猫の恩返し」「THE CODE/暗号」が活弁士付きで上映された。

バリアフリー映画は障害者のためだけではない。総合芸術の映画にはさらに奥深い可能性がある。「卜書きを棒読みするのではダメ。主観も交えて工夫しながらスクリーンの情景を説明しなくては」。

活弁士、佐々木さんの言葉が印象に残る。【野沢和弘】

視覚や聴覚に障害のある人たちも日本語字幕と副音声で邦画を楽しむ「バリアフリー映画祭」が、二月下旬から滋賀県内二万所で開催される。邦画の劇場上映で字幕と副音声をつける試みは珍しいといいい、全国未公開や人気作を含む五作品を上映する。県内で開催する全国障害者芸術・文化祭滋賀大会(県など主催)の締めくくりにイベントとして、自らも障害のある学識者や障害者施設、映画制作会社の代表者でつくる研究会が企画した。

副音声で、脚本や制作者の意図を反映するよう心がけたという。例えば上映作品の一つ「ぐるりのこと」では、人を探す場面「ぼつんと立っている」判決公判を前にしたシーンでは「広々と天井の高い法廷」などと、せりふがなくとも登場人物の心情や映像効果を押し量れるナレーションを入れる。

## 障害者配慮 邦画に字幕と副音声

県障害者自立支援課は、臨場感あふれる映画館で上映を楽しむための声が視覚障害者からあやうい、「少しのサポートさえあれば、障害者も一緒に映画を見られる環境はつくられることを示したい」と話している。

上映作品は「ぐるりのこと」のほか、今年公開予定の「THE CODE/暗号」とジブリアニメ作品の「猫の恩返し」「絵の中のほくの村」「花はどこへいった」。大津市のユナイテッドシネマ大津で二十一日、三月六日、彦根市のパシフィックホールで三月十三日、十五日、一日二回上映する。

期間中、移動支援や会場への誘導を担うボランティアも募っている。

問い合わせは県社会福祉事業団0748(31)2481。

### 県内2会場「劇場で楽しんで」

### 今月下旬バリアフリー映画祭

### 研究会日程内容

- 8月5日(火) 第一回研究会(東京) \*バリアフリー映画の製作に向けて、研究・開発スタート
- 8月6日(水) 『絵の中のほくの村』副音声/打ち合わせ 10:00~@シグロ
- 8月30日(土) 『絵の中のほくの村』副音声/スタジオ収録 10:00~@協映スタジオ
- 10月3日(金) 第二回研究会(東京) \*バリアフリー映画を製作する作品の候補を上げ、5作品を選定 \*製作スケジュールの確認 \*9月に試作した劇映画を参考試写 \*選定した劇映画及びドキュメンタリー映画、2作品の副音声版を製作 \*聴覚障害者用字幕を試作開始
- 11月17日(月) 試写(東京) \*試作した劇映画の副音声版の試写会 \*選定した劇映画またアニメ映画1作品の副音声版を製作 \*聴覚障害者用の字幕製作 \*上映に向けてのプレス発表 \*チラシ作成準備
- 11月19日(水) 『花はどこへいった』副音声/吹替え収録 9:30~@プロカムスタジオ
- 11月25日(火) 『花はどこへいった』副音声/スタジオ収録 10:00~@協映スタジオ
- 12月1日(月) 第三回研究会(東京) \*報告書骨子検討 \*試作した劇映画またはアニメ作品の試写会 \*選定した劇映画またアニメ映画1作品の副音声版および、字幕版の製作
- 12月2日(火) 『ぐるりのこと』副音声/打ち合わせ 10:00~@シグロ
- 12月5日(金) 『ぐるりのこと』副音声/打ち合わせ 10:30~@シグロ
- 12月6日(土) 『ぐるりのこと』副音声/スタジオ収録(1日目) 10:00~@協映スタジオ
- 12月7日(日) 『ぐるりのこと』副音声/スタジオ収録(2日目) 17:00~@協映スタジオ
- 1月7日(水) 第四回研究会(東京) \*上映スケジュール確認 \*フォーラム発表内容協議
- 1月15日(木) 『猫の恩返し』副音声/打ち合わせ 16:00~@シグロ
- 1月19日(月) 28日(水) 座談会「活弁の技術を活かした視覚障害者用の映画副音声をめくって」大河内直之、天野克彦、佐々木亜希子、山上徹二郎 \*研究会メンバーによる、座談会を開催し、副音声、字幕それぞれの研究成果と課題についての整理を実施
- 1月22日(木) 『猫の恩返し』副音声/打ち合わせ 10:00~@シグロ
- 1月28日(水) 『猫の恩返し』副音声/打ち合わせ 13:00~@シグロ
- 1月30日(金) 『THE CODE/暗号』副音声/打ち合わせ 15:00~@シグロ
- 2月2日 座談会「映画に付ける聴覚障害者用字幕をめくって」中野聡子、飯泉菜穂子、赤松立太、山上徹二郎
- 2月7日(土) 『花はどこへいった』『ぐるりのこと』字幕/スタジオ作業 10:00~@三友スタジオ
- 2月22日(月) 『猫の恩返し』『THE CODE/暗号』字幕/打ち合わせ 18:00~@東京大学先端科学センター
- 2月5日(木) 『THE CODE/暗号』副音声/打ち合わせ 14:00~@東京大学先端科学センター
- 2月8日(日) 『猫の恩返し』副音声/スタジオ収録 13:00~@協映スタジオ
- 2月10日(火) 『THE CODE/暗号』副音声/スタジオ収録(1日目) 10:00~@協映スタジオ
- 2月11日(水) 『絵の中のほくの村』字幕/スタジオ作業 10:00~@三友スタジオ
- 『THE CODE/暗号』副音声/スタジオ収録(2日目) 18:00~@協映スタジオ
- 2月14日(土) 『猫の恩返し』字幕/スタジオ作業 10:00~@三友スタジオ
- 2月15日(日) 『THE CODE/暗号』字幕/スタジオ作業 15:00~@三友スタジオ
- 2月20日(金) 22日(日) 第五回研究会(滋賀) \*アムニティネットワーク・フォーラム \*報告書作成

- 3月 \*報告書完成 \*実績(会計)報告終了

平成20年度障害者保健福祉推進事業(障害者自立支援調査研究プロジェクト)  
「映画活弁士の活弁手法を活かした視覚聴覚障害者のための副音声の開発ならびに製作事業(バリアフリー映画製作事業)」  
研究員名簿 (五十音順)

氏名	所属
赤松立太	(パツンパツン・字幕製作会社代表)
浅川智恵子	(日本IBM東京基礎研究所アクセシビリティリサーチ担当)
東秀明	(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部)
井野秀一	(独立行政法人産業技術総合研究所 主任研究員)
飯泉菜穂子	(学校法人大東学園世田谷福祉専門学校)
大河内直之	(東京大学先端科学技術研究センター リサーチフェロー)
太田敦子	(NHK記者)
大和田廣樹	(ブロードバンドタワー取締役会長・THE CODE/暗号プロデューサー)
岡山慶子	(ペーパードット・ウェーブ実行委員長)
事務局 副委員長 片桐公彦	(全国地域生活支援ネットワーク)
北岡賢剛	(全国地域生活支援ネットワーク)
佐々木亜希子	(活動弁士)
新藤次郎	(近代映画協会、日映協理事)
末安民生	(慶応大学看護医療学部 准教授)
代島治彦	(スコブル工房)
高木啓伸	(日本IBM東京基礎研究所アクセシビリティリサーチ担当)
高原伸幸	(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部)
田中正博	(全国地域生活支援ネットワーク)
事務局 委員長 田中正博	(全国地域生活支援ネットワーク)
水光源彦	(全国地域生活支援ネットワーク)
戸枝陽基	(全国地域生活支援ネットワーク)
中野聡子	(東京大学先端科学技術研究センター)
西嶋美那子	(元日本経団連 障害者雇用相談室アドバイザー)
野沢和弘	(毎日新聞社)
副委員長 福島智	(東京大学先端科学技術研究センター 教授)
堀田賢豪	(社)日本広報協会 調査・企画部)
村瀬慶子	(NHK放送局 ディレクター)
副委員長 山上徹二郎	(映画製作・配給会社シグロ代表 日本映画製作者協会理事)
オブザーバー 山添時彦	(佐々木亜希子マネージャー)

発行日 2009年3月31日

編集 「映画活弁士の活弁手法を活かした視覚聴覚障害者のための副音声の開発ならびに製作事業(バリアフリー映画製作事業)研究会」(平成20年度障害者保健福祉推進事業(障害者自立支援調査研究プロジェクト))

デザイン 高石巧

発行 千8911201 鹿児島市岡之原町10005  
TEL 099-822-8705 FAX 099-822-4073  
E-mail shien-net@crest.ocn.ne.jp

特定非営利活動法人 全国地域生活支援ネットワーク  
代表理事 田中正博



## バリアフリー映画の上映案内

バリアフリー研究会で研究・開発しました、活弁による副音声付視覚障害者用映画、および聴覚障害者用の日本語字幕つき映画の上映を受け付けます。『THE CODE／暗号』『ぐるりのこと。』『絵の中のぼくの村』『花はどこへいった』の各作品の上映を希望される方は、下記要領にて、事務局までお申し込みください。よろしくお願いたします。なお、各映画作品のチラシ、ポスター、パンフレットなども用意しております。

●上映料金について

- 有料上映会の場合 入場者(鑑賞者)1人600円×人数
- ・入場者数200人以下の場合、最低保証として上映日1日あたり12万円(消費税込)
- ・入場料は、1人1,000円以上の設定をお願いいたします。

- 入場料を取らない借り上げによる上映会(フラット)
- 入場者数 200人未満:12万円/200~300人:16万円/300~500人:24万円 (いずれも消費税込)
- 500人以上での上映会の場合は、ご相談ください。

\*各映画作品のチラシ、ポスター、パンフレットなども用意しております。

●申し込み方法について

申し込み欄に必要事項をご記入の上、FAXまたはメール、もしくは郵送にて事務局までお申し込みください。なお、劇場公開中の地域、および劇場公開予定の地域での貸出は、日程などを調整させていただく場合がございます。

●上映用テープ、DVDの受け渡し

特に指定のない場合、上映の2日前までに当方からお送りいたします。上映が済みましたら、速やかに事務局までご返送ください。なお、返送時の送料は主催者側の負担となります。なお、上映用プロジェクターなどの上映機材や上映技師などにつきましても、お気軽にご相談ください。別途料金となりますが、当方にて対応させていただきます。

●上映報告書を提出ください

上映が済みましたら、上映報告書をFAXまたは郵送にてお送りください。上映報告の用紙は上映受付後に当方よりお送りいたします。

●精算及び、支払いについて

上映終了後、映画作品の上映料を当方よりご請求いたします。宣材物などの請求も特に指定のない場合は映画上映料と一緒にのご請求となります。請求書と同封の郵便振替用紙でご送金いただくか、当方指定の銀行口座への振込みによるお支払いをお願いいたします。

●アンケート調査へのご協力のお願い

上映会に参加された方々への、アンケート調査をお願いしております。必要な枚数のアンケート用紙をお送りしますので、上映会場にて回収後上映報告書とともにお送りいただけますよう、よろしくお願いたします。

■上映申し込み先(ご不明な点なども、下記までご連絡ください。)

特定非営利活動法人 全国地域生活支援ネットワーク【事務局】〒891-1201 鹿児島市岡之原町1005  
tel 099-822-8705 fax 099-822-4073 / E-mail shien-net@crest.ocn.ne.jp

『	<b>』上映申込書</b>	お申込日	年	月	日 (NO.	※事務局)
●主催者 (ご担当者)		●主催団体				
●住 所						
●TEL		●FAX		●メールアドレス		
●上映日		第一希望	月	日 ( )	第二希望	月 日 ( )
●上映会場		●上映時間		●計 回上映		
備 考 (希望作品名を明記ください)						

